

183

589



0053455000

3

0053455-000

183-589

変態文献叢書

文芸資料研究会

第6巻

昭和3

AIA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

変態文庫
第6巻
会本叢書

會
年
雜
考

卷

會本雜考

會本雜考

卷



Handwritten notes in cursive script, including the characters '會本' and '雜考'.

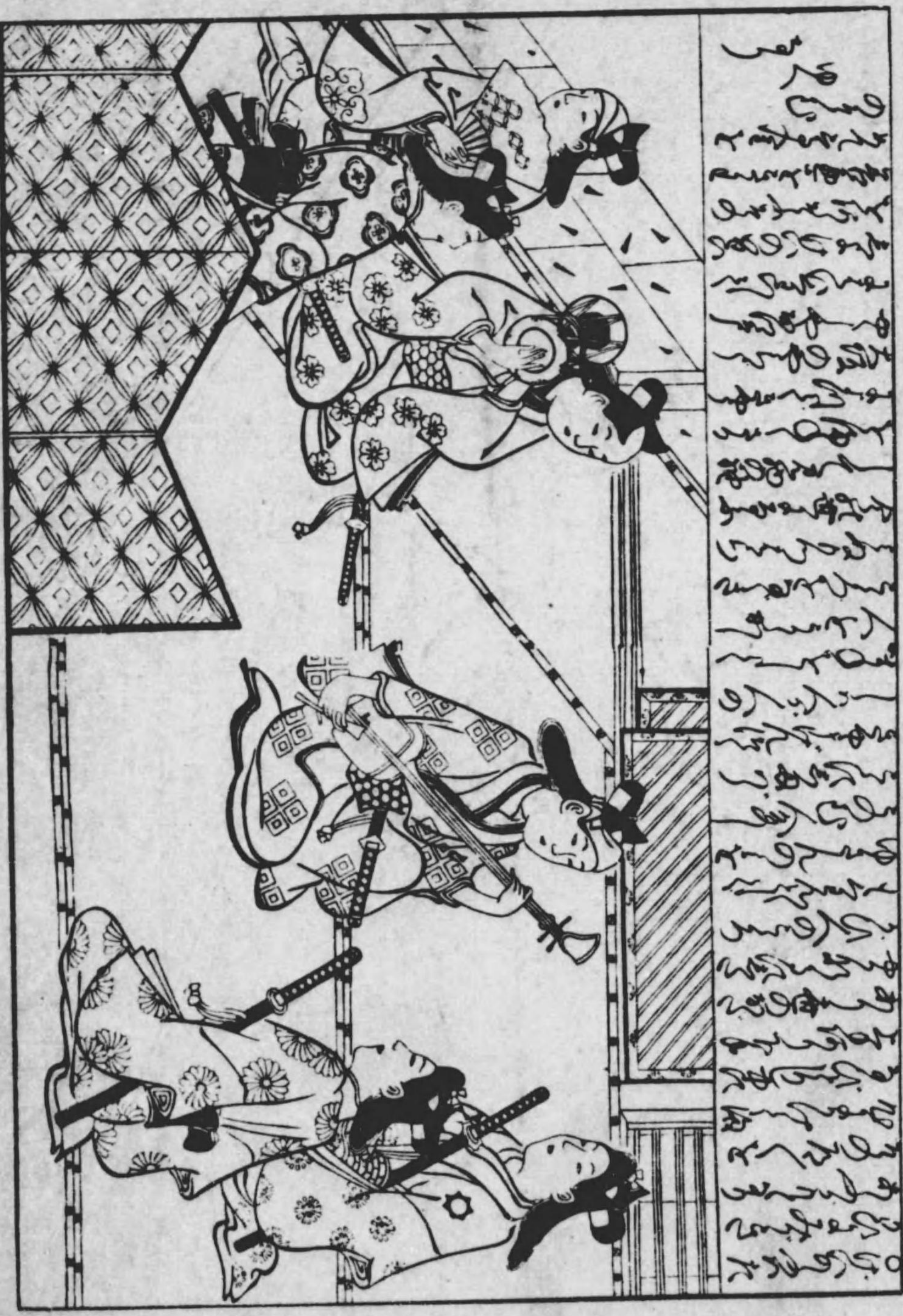
詩解小工名

變態文獻叢書
第六卷

今幸甜乃
今

發行所 文藝資料研究會

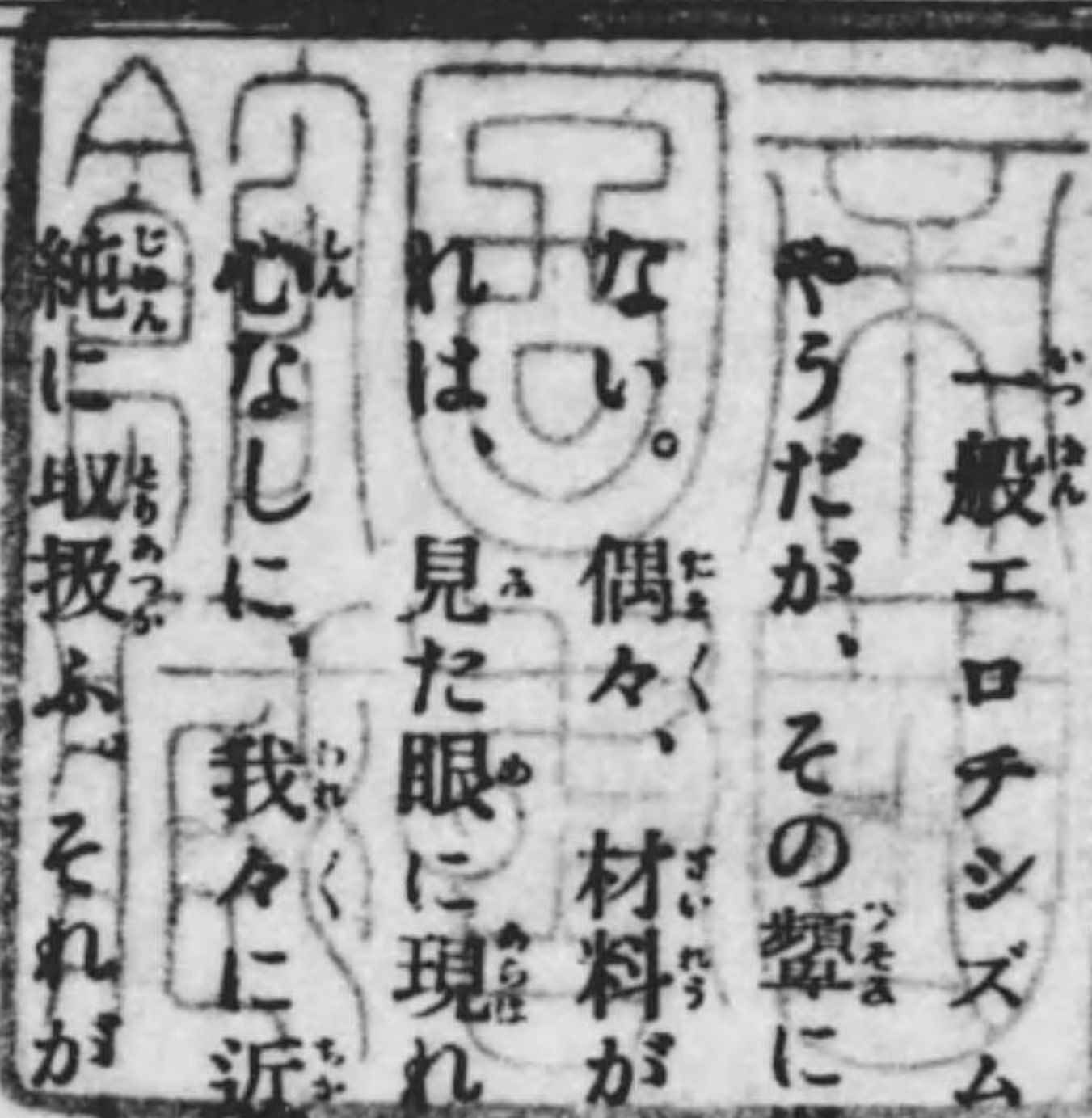




載所「續世淨」

自叙

茲に、「會本雜考」一冊、成り了んぬ、本朝始めて、斯種文献物の著として現はる、と自讃めかして、それも氣障に陳ぶるを己める。とにかく纏つた存在としては、これが皮切りであらうことは、謂ひ得られるかと思ふ。



一般エロチズムに關した、渉索雜考の類は、最近、追隨的に、著又は編に夥しく出でたやうだが、その類に倣うたのではない。自分は、決して道樂氣に、これを爲してゐるのではない。偶々、材料が材料だから、筆遣ひも、自己悅樂半分に爲してゐるやうに見える。それは、見た眼に現れる、讀者自身、或は悅樂陶酔の反映であらう。自分は、寧ろ、何等の成心なしに、我々に近い祖先の、作者階級・畫家階級の殘した、業績の一途として、これを單純に取扱ふ。それが、いゝとも悪いとも思はない。唯、かうした物、その存在も、過去の「我等」には、必然の存在だつたのだ。自分たちは、それを唯、過去の人々の生活相の一端として、これを眺める。他の言葉では、或は、性的生活相とも謂へようが、性的生活も生活の中である。

即ち、此、分ちて九章と爲したが、縦には、斯種特殊の文獻、いろくの考査。横には、これによつての、當時「江戸時代」の持つた生活相の反面的照察である。第一章は、その特殊文獻に對する概論とも謂ふべきものである。正系文學物とも接觸を試みた。即ち正系文學史、正系脚本史、正系戯作者傳の附録ともまた見做されよう。これを縦横に趁れば、一エロチシズム物に對する雜考、さうした浮薄な猥雜な概念の起り易き物たるのでは、無いのである。

と、我佛尊しの辭とも見えようが、がとにかく本著を以て、頃日頻出するらしい猥談物、猥考物の類と一視、又は、取類的に取扱はるれば心外である。他は、いざ知らず、自分としては、傍系的ではあるが、(或は、これが源のまた源流か、)特殊の文獻的考究として、雜多な問題も採り入れたものとして、先づその一端を自ら纏めたものである。寧ろ、硬きに過ぐるの非難を生まむを、欣ぶものである事を述べておく。

昭和三年晩秋

陛下、大禮に發駕したまふの日

封醉小史誌

凡例

一、會本雜考と題したのは、或る都合上よりである。元來、此の「會本」の文字使用は、天明頃の春章描くに多く現はれ寛政頃に絶えてゐるが、今、著者は、その以前、その以後の全部に、この文字を以て、代へた。したがつて末期物を扱つた所などは、稍そぐはぬ感じがあらうが、それは、この強ひて統一させたためと想して頂きたい。

一、第一章は、嘗て他に採録したものであるが、今、此者の概論として、再びこゝに使用した。但し此者に入るゝに際して、其後の見聞を多分に入れて、改修の跡著しきものがある。

一、著者自ら、内容に就て謂はゞ、第一章は、概論。第二章第三章第四章は、正系文學物との接觸を圖つたもの。第五章は、當時江戸人の無稽な空想の一端。第六章は、江戸人悦樂の一半たる芝居との接觸點、その一端。第七章は、その他の一半たる遊里との、斯種の物の接觸點、その一端。第八章は、此種の物の異體。而して正系脚本と接觸を試みたもの。従つて南北に關する一考察も加へた。第九章は、會本その物に關するといふよりも、當時の名優の、逆も現代

想像もつかぬ變態性生活に關する正直な記録として、此の會本類を以てその反證としたのである。仍て、雜考と名づけた所以である。

一、挿繪及び口繪は、本著本文に交差あるもの、又は然らざるもの、機々を抜いた。直接、交差なきものも、一面、傍系的浮世畫集の意味に於て、此の機會に採録したのである。尙、圖版の採録に於て、一般的ならず、しかも同一人のもの多きは、他のもの、採録が構圖の上より困難なためだったのである。

一、圖版(口繪と挿繪)略解を別に附した。略に過ぎるかも知れないが、斯種に對する紹介、そのためより諒してもらひたい。

一、尙、本著第六章に引用した、「上方懸修行」は、其後、三冊の完本を賸た。天は、雪野を四谷怪談のお岩の幽霊を使つて、鴻池から奪ふ菊五郎。地は、稍挿話の體裁。人が、紹介の如し。即ち全部、菊五郎滯阪、興行中の記事で、これに、坂三津と三代目歌右衛門とが、互ひに、勢投(三津は、菊に、歌は、鴻池に)してゐるのである。悉しくは、他の機會に。

—以上。

會本雜考

目次

第一章 會本の諸形式

○繪本形式、師宣時代—西川祐信、奥村政信—石川豊信—鈴木春信—磯田湖龍齋—勝川春章—小松百鶴—清長、春朝、榮之、歌麿、政演—彩色摺—北齋、英泉、國貞、國芳—貞秀—擬繪本—中本型。○挿繪本形式、西川祐信—月岡雪村—初代豊國—英泉—國貞、國芳。○版畫形式、政信、春信、豊信—錦繪—湖龍齋—雪村—清長、春潮—英泉。○書帖仕立、春潮、歌麿、北齋、英泉、國貞、國芳。○異種。一、文學形式、祐信、歌川末派。二、鳥獸圖様、歌川末派。三、極小判。○文學物、浮世草紙風—好色本—八文字舍風—豆男、豆女—訓蒙圖彙形式—讀本風—一筆庵—猿猴坊月成—人情本—中本型—半紙本物—草双紙—黄表紙型—笑話本—春朝—脚本内容—狂詩集—俗話の註解—「徳歌國字解」。○畫材の主なるもの、角力取、若衆—役者—東海道物—江戸名所物—浮世節—大津繪—節

第二章 浮世草紙系の會本

四編の性慾描寫—「好色年男」—「好色赤烏帽子」—「好色囃紫」—「好色玉子酒」—「好色兵捕」—祐信描く—其蹟—○「艶色玉簾」—日録—本文—本文抄—「情ひな形」序—作者畫者明示—祐信—自笑—本文。

第三章 摸洒落本の會本

「傾城買四十八手」を踏襲—月成の自序—目録—筋—合巻資料—洒落本文體。

第四章 摸黄表紙の會本

京傳の「江戸生艶氣棒燒」—名作物—會本との交渉—田舎藏氏もの多し—京傳の「四十八手」もの、いろ／＼—「艶本艶次郎」の存在—「艶本艶次郎」口繪の内容—京傳鼻—原作とは經過に於て雲泥の差—艶次郎、會本によりて救はる—「艶本艶次郎」—附文の内容—作の年代

第五章 會本の大人國と小人國

異國廻りのいろ／＼—大人國廻りを會本に發見—不器用又平齋「泉湯新話」—「泉湯新話」下巻、大人國廻りの略筋—善光寺金佛の湯浴—成田屋禮讚—大人國にも江戸がある—大人國男女の會話—金佛を飲み込む—金佛をさりかへす—痴夢一醒—「泉湯新話」上巻中巻—朝夷の小人國廻り—羅馬字風落款。

第六章 會本の役者最良

芝居と江戸文藝、會本類—役者似顔繪。第一、役者故と名を入れた西川繪本—「西川筆の海」—三巻の役者の名—役者名の詮索—附文（「京枕」の例）—祐信、似顔の初めか。第二、菊五郎と鴻池の鞠當—「上方戀修業」下巻—藤子雪野—三角關係、鴻池の自慢—菊五郎の氣焔—開の池金庫の金の眩やき—菊五郎親の述懐—三世菊五郎—その年代—述べた親は、養父の松助か—三世菊五郎の後妻おさき。第三、「志願のまん」から

第七章 會本の野暮客描寫

「あふみ八雲」—野暮客の描寫、辛辣を極む—當時の町藝者—野暮、御機嫌なる—帯に洋字。

第八章 根本仕立の會本

根本仕立「雪月花艶本」の三冊—會本の芝居役者讚美—同じく概観—「雪月花」艶本序の巻のはじめ—關の扉のもじり—見物の評判—團十郎と最良の女客—本文の脚本—中巻梗概—下巻梗概—主材は新内—成田屋禮讚のお守殿の見物—作者月成に就て—二代蓬來と南北—南北の作蓬來の校—南北孫の龜岳。

第九章 お傳三津瀬川と會本

はしがき—三人運押の事實—稀世の女豪—（上）、「多話戲草」の本文—お傳の密夫—お傳の晩年—「近世日本演劇史」の記事—鏡山狂言の時—菊、三津に託を入る—その年代考査—お傳菊の訛落は、文政九年秋—託を入れたは、文政十三年—お傳死す—三津と菊、後期の復活—三津と菊、死亡當時の記事—三津菊追善冊子—三津の性格と家庭—菊の性格と風采—做顔見世番附小傳—お傳の年齢と丙午の女—お傳と三津との交渉

の始まり—お傳亂行の年代—菊と三津との提携—文政二年より—異説—菊、三津にも盡す—三津の寛仁—皮肉な會本作者—「三津瀬川上品仕立」の梗概—「三津瀬川法花勝美」の梗概—八代目物の「明烏夢物語」にも踏襲—「極樂遊」三冊の存在—上巻の梗概—冥土で三津がお大女郎と邂逅する—お傳の死は文政十二年頃—お大と三津の訛落—中巻梗概—極樂旅の途中、経壽に逢ふ—経壽とお大と逃亡—菊、死んでも變態—下巻梗概—菊とお大と娑婆以來の對面—三津の復讐—南北の捌き—「風俗壽意姑傳」—お大の方と大名の三好と小姓の菊彌—「粹樂記」はその後編—鏡山の暗示。補記—竹本小傳としての年代—「鏡山」の芝居は天保二年ではない—「多話戲草」は、年代に錯誤あり。（下）—「志多定」—正確豊富な文獻—運押事實指摘の最初—「志多定」は一冊物也—文政十年版—「志多定」の序—「同」目録—名よせの名と實名—菊の評判—菊、女房を離縁—「山姥」の時—ぞうり打—盆狂言の頃—おかみ様とす—藤藏、伴五郎の評判—三代目菊五郎の評判—團十郎の評判—爲三郎、道世の評判—兼三郎の評判—紫若の評判—當八、鏡五郎の評判—延壽、榮壽の評判—三壽藏（三津藏が本名か）、國亭の評判—其他番頭などの評判—三津五郎の評判—門弟よりいはれてお傳と別る—こけのやうなれど夫婦の情あり、と皮肉る—「志多定」の挿繪。附記—菊と七代目との性的交渉—七代目と菊之丞—兄弟の契約—「夢、ろ」に出づ—文化十四年三月芝居の事也—菊之丞は十六歳—菊之丞の宣傳的政策か—變態性の最初の相手。

會本甜名

封碎小文名

第一章 會本の諸形式

極く概念的に、自分のノート代りに記しておかう。

繪本形式のものを第一に。繪本位では、無論菱川師宣以下の浮世繪師の餘技若しくは精力に成つたものが殆どである。師宣時代は、大抵美濃大判のやうである。我々が偶々にして見受ける假名草子ものと、殆ど類似した大きさ、體裁のものである。さうして此の當時は、無論上司の干渉も寛であつたため、奥附にも繪師菱川昔兵衛、又は菱川氏など、署名したのが多い。西川祐信には、横本物が多い。大本物もある。冊數は、五冊もある。三冊もある。取材の範圍ひろく、用紙も薄葉摺の氣の利いたものもある。奥村政信には横本三冊、同種に見えるものが頗る多い。當時の役者や評判娘をモデルにしたやうなものもある。大抵、各圖、賛として句を載せてゐる。石川豊信には、祐信と同様な、横本のものを見た。大本のものは、何とも斷



西川祐信、奥村政信

石川豊信

鈴木春信

磯田湖龍齋

勝川春草

小松百龜

春潮、榮之

歌麿、政演

彩色摺

言が出来ぬ。横本のもは、初めに、繪が數十圖續き、或る物語を追ふとよりも、個々のものが多かつた。終りに數枚の文章(或る説話)が附せられてゐる。(師宣には、この説話はないやうである。即ち大抵、彼の普通於て、説明やうの文字を陳れ、かゝる説明と繪とで終つてゐる。即ち、奥附のすぐ前までが、繪であるのである。)鈴木春信になつて、普通の半紙本になつた。外題もいろ／＼暗示的なひねつたものを工夫し、繪が大抵九圖位るづゝあり、その終りに、はじめの繪に關係のない或る短話が載つてゐる。繪も聯絡のない、個々のものである。さうして、冊數も大抵上中下三冊となつてゐた。(この以前は、自分の所見では、大抵一冊)但し此の春信にも例外はあつて、中本仕立の、大阪酒落本の「雪月花」の版木を其儘嗣ぎ足して初めに艶畫を新刻したものや、又は、横本五冊物などの實物もあつた。磯田湖龍齋も春信の風で、はじめの繪數枚、説話少々といつた形式で、半紙本である。(但し湖龍齋には、版畫形式のものも多い。これは後説。)勝川春草も然りである。同じく數枚の繪、短かい挿話、半紙本上中下の三冊が多い。春信と同時頃から、會本作のある小松百龜には、「肉蒲團」のやうな横本もの、「訓蒙好色圖彙」のやうな半紙本もある。但し此の「訓蒙好色圖彙」は珍らしく、春夏秋冬の四冊本である。清長、春潮、榮之、歌麿、政演の輩、皆春草と同様、半紙本三冊が多いかと思ふ。但し歌麿には、間々、横の小本形式のものもあつた。

これまでに至る繪本形式のものは、殆ど墨一色である。師宣は無論の事、政信、春信、湖龍齋と雖も。(但し版畫形式——一枚繪もの——は例外。さうして繪本形式であつても、扉繪だけは、紅摺繪もあつた。)歌麿になつて、時をり彩色摺のものと、墨摺とを見受ける。同じ本であつて、多色摺のものと、墨一色との二様あるものも見た。特製並製の謂か、或は墨一色のものは、再摺とでもいふべきであらう。着彩本位で

北齋、英泉、國貞、國芳

貞秀

挿繪本

中本型

○挿繪本形式
西川祐信

月岡雪鼎

英泉
初代豊國

國貞、國芳
○版畫形式
政信、春信、豊信

描かれたものの墨一色本は、着物の柄などが、大まかな輪廓で、間の抜けた感じが夥しい。北齋、英泉、國貞、國芳の類は、殆ど多色摺である。さうして、その終りに、短かい説話のあること例の如し。さうして冊數も、一冊物若しくは三冊物である。(初代豊國には、たしかな所見がないから、何とも謂へない。貞房(國貞)の如き歌川末流もさうである。但しこの頃、挿繪本位の、擬繪本様のものを盛んに生んでゐる。この頃から美濃四ツ折、即ち中本型のものが頻出してゐる。半紙本のものも多い。但し中本型では、英泉があり、(英泉以前の疑初代豊國物に、中本墨摺物といつた墨例もある。)歌川末輩があり、國貞、國芳の二輩は、寧ろ中本型よりも、半紙本が多いやうである。

挿繪本形式のものでは、西川祐信に見た。それ以前は、所見がない。祐信のこの形式のもの、多く三冊物、八文字舎本と殆ど同じく、或る説話が冒頭より始まつて、それに隨處、挿繪として描かれてゐる。形は大本もあり、横本(枕本型)もある。月岡雪鼎のものにも此の類がある。特に、雪鼎或はその門流(其の子の)のものには、訓蒙圖彙やうの大本がある。これは殆ど百科全書の感じである。春信、湖龍齋、春章、政演あたりには、別に此の挿繪本形式のものを知らない。豊國(初代)になつて、讀本形式の、まゝ繪をまじへたものを見た。英泉に於ては、此の挿繪本形式のものが、又多い。英泉は、筆作の技も割合に長けてゐたので、彼の畫作といつた、讀と繪と混和したものも多し。大抵、人事内秘に關する教訓、説示の類を綴り、その最初又は途中に於て圖畫を挿んでゐる。但しこの畫は、繪本形式のものとは異り、岱緒と墨の二色摺位るものが多い。國貞、國芳に於て、此の挿繪本形式のものも頗る多い。

版畫(一枚繪)形式のものにあつては、その最初の所見は、政信である。大判版畫大の墨摺で、十二枚揃大

錦繪

湖龍齋

雪鼎

清長・春潮

英泉

泉晃

まかな描線で感じは頗るよい。紅筆彩色のものも見た。その次では、春信である。(豊信にもありとは聞いてはるるが、まだ確實なものを経験しない。)春信のものは、中判である。即ち彼の好みの中判型で、一枚物といふよりも、寧ろ數枚にて或るまとまつた感じを出さうとしたらしい物である。よりて、枚數も、大抵同じ畫様、氣分の下に十二枚一組である。(年十二ヶ月の意味からであらう。)(但し豆右衛門をもじつたまね、えもんのやうに、中判二十四枚もある。湖龍齋のものにも此の豆と豆女との二十四枚がある。)然しその中の數枚、若しくは零碎な一枚たりと雖も主なる目的は達しられてゐる。着彩は、彼の錦繪に見ると同様である。彼の普通版畫の材料となつた、雪中の男女(有名な鶯娘)や、柳屋お藤の如きを材にしたものを自分が見た。湖龍齋には、大判のもの、中判、小判のもの、種々ある。中、小判のものが、數量に於て多いかと思ふ。大抵、十二支とか、十二ヶ月とかいつたもので、着彩は錦繪と同じで、枚數は十二枚一組である。雪鼎たち、その門流のものには、畫帖風になつた、一枚づゝの大判物があつた。これは、多く墨一色であつた。清長・春潮にも、大判(錦繪大)、着彩で十二枚組と思へる物があつた。さて、以上の中、春信から春潮への間、繪の詞書がありや無しやといふと、春信にはまだ會話やうのものを見ぬ。湖龍齋にはなきとあると、兩様を見受けた。春潮に至ると、必ず短かい言葉が繪の空間に記されてあつた。歌麿になると、同じく兩様あつたやうである。北齋、英泉、國貞、國芳以下然りで、中、英泉のものには、比較のお座へ出せるやうな、暗示風のもの、でないものとを混ぜた一組物もあつた。燗熱した果は、却つてかうした暗示風な、白湯一杯といつたものを案出したのであらう。勿論かゝるもの、一二枚は、春信あたりにも間々見受ける。然しそれは全くの附録である。然るに、この英泉(その門人の泉晃など)に至ると、附

○畫帖仕立
春潮。歌麿。北齋
英泉。國貞。國芳

○異種
一、文學び式
祐信
歌川末派

二、鳥瞰圖様
歌川末派
三、極小判

○文學物
浮世草紙風

録ではなく、他と同格に、同様に精力を揮つたこの暗示、所謂催情ふうものが多いのである。畫帖仕立のものも、春潮、疑清長、歌麿等にある。大抵、帖の題簽があつて、序跋完全である。降つては、北齋、英泉の輩にもあつた。國貞、國芳の輩にも此の綴ち目なき畫帖風のものもある。但し此の北齋あたり以後になると、大抵はその終りに、二三枚の文章、狂歌やうのものがあつて、また初めにも、當時の文人共の畫賛、序のやうのもの數枚が掲げられてゐる。色山人(蜀山人が事)や金鶏などは、この序の筆者である。次に、多少の異種と思はれるものを挙げよう。

一、文學び式のもの。このものがまた古くは、祐信及び其一派の横本物、後期の歌川末流の畫家のものに多い。即ち、初めに繪があつて、終りに、女男の文のけいこのやうに、に遺ス文として、様々な文の書體、文例が挙げられてゐる。末期のものでは、文のはやしといつた外題で、中本型になつてゐる。(即ち是らは、入るれば、前の挿繪本形式に入るべきもので、着彩のものはない。)二、鳥瞰圖様のもの、數枚を繼ぎ合したもので、取材は多く廓内である。此の風、歌川末派である。着彩絢爛たるものである。三、極小判、數十枚。極の小判で、數十枚、種類から謂へば、數百枚である。此等は、例の初代廣重の東海道五十三次が喝采を博したが爲に、その風を真似て、東海道に材料を借りたものが多い。即ち東海道のみで、五十何枚はあるわけである。其他様々で、湖龍齋あたりの、十二支の十二枚の小判型のものよりは、氣分も雜駁で、取材も極めて猥雜である。

次に、文學物ともいふべき、讀本位、若しくは讀八分、畫二分といつたものを列べて見よう。浮世草紙風のもの。古くは、半紙本型のものより、後の八文字舎本の三味線物、禁短氣などに見るやうな横本であ

好色本

八文字舎風
豆男、豆女

訓蒙圖彙形式
讀本風

一筆庵
猿猴坊月成

る。但し此の時代には、凡て公刊であつたから、會本として取扱はない、普通好色本のものもある。但し此の種のものも、繪は平凡といふだけで、文に於て猥雜、即ち准會本といったものが、凡てである。色里三所世帯の如きもこの中に入れば入れられ得よう。殊の此の「三所世帯」の版木を再使用、それに猥畫を附加した、元祿九年の年號のある「西鶴繪入好色兵揃」の五冊本の如きは、全く純會本に作りかへたのである。八文字舎風になつてからは、その猥雜さが度を越してゐる。豆男を材料にしたものは、大抵これである。豆男の他に豆女もある。(この豆男、豆女の形式は、支那の和尚奇談あたりの一寸法師で、巨身に變化しうる例の說話あたりの換骨、脱胎から來てゐよう。)稍後まで、これが續いて、中本型のものにも、此の豆男豆女式のものがある。(豆男の趣向は、この頃歡迎されたりしい。湖龍齋の版畫あること、前にいうた。)普通の年表・書目にも誤つて一部分を載せてゐるが、「魂膽色遊懐男」五冊、「女男色遊」五冊、「榮花遊二代男」五冊は、所謂豆男物枕本の三部作である。なほ、此の類は、殆ど無數であらう。繪は普通であつて、文に於てたわれの限りを盡してゐる。訓蒙圖彙の形式が、月岡派に多いことは述べた。(丁度此の頃、不知足散人(小如きが生れてゐる。これは、洒落本の「風流仙傳」と同じや)さて、讀本風(松百鶴)の「魂膽遊輝魚」のうな趣向でそれより猥、半紙本五冊物。繪は、平凡である。)さて、讀本風(松百鶴)のものが後に生れた。京傳、馬琴等の讀本の大家が現れ、讀本を鼓吹した爲、これに似たものが頻出した。前代迄の、浮世草紙様、八文字舎本様のものは、殆ど繪は眞面目なるにも不拘、以後の讀本形式のものとなつては、文、畫共に普通でなくなつてゐる。さうして前代迄の墨が、以後は、多色摺と變つてゐる。これらの畫家には、初代豊國、英泉、國貞等が多い。英泉の、玉藻前の半紙本五冊、筑紫琴(石童丸の父加藤重氏を材としたもの)半紙本五冊の如きは、これである。さうして、英泉のものは、一筆庵(英泉の戲作の上の名)自身の文と畫で、時に白水編次又は一筆庵ともしてゐるが、豊國・國貞らに至つては、文は、多く他の戲作本業のものに借りてある。猿猴坊月成(實は

人情本

中本型
半紙木物

草双紙風

黄表紙型

笑話本

春期

二代焉馬)などは多く此等に文詞を綴つてゐる。次に、人情本(中本)が盛んになると、またこの形式が生れた。新内の曲中人物を材料にした人情本が流行つた頃には、又これを踏襲した中本型のものが現れた。半紙本の物もある。これらも、口繪挿繪共に、多色摺で、繪は猥雜なものとなつてゐる。文は普通の墨一式であるから、即ちこの挿繪にありては多色摺の必要上、かはつた用紙を使用し、それを本文の紙に、貼り續けてゐる。但しつまらない墨一式のものもある。「春雨衣」などは、全部墨である。(然し此の「春雨衣」は平凡なものである。)草双紙が流行ると、又此の風の物が流行り出した。「漢楚軍談」などは此の例である。十何編と重ねられ、畫、文共に本性を發揮してゐる。尙中本の一型ではあるが、稍異つたもの、即ち滑稽本として東海道膝栗毛(一九作)にまねて、「膝栗毛」十數冊續きの物もある。御丁寧に表紙體裁、本物に似せてゐる。凡て文學界の聲名多き作を眞似てゐることは、僕指に邊がない。八犬傳の如き、田舎源氏の如き、即ち無論である。

其他の全くの異種としては、黄表紙型のもの、笑話小本型のものがある。共に繪は本來を失はぬものである。黄表紙では、夕部口話(夕部の口話)箱入娘双居(箱入娘の双居)の上下二巻物の如き、その例である。普通の黄表紙本と同じく、外題も、うすい岱緒と墨の濃淡との三版である。一卷五枚であることも本式であるが、内容に至ると、稍黄表紙式を脱してゐる。即ち、普通の繪本型の詞の簡單なものと同じく、(此の本、政演(京傳)の畫作だらうと思はれる。)

笑話本では、小本で一冊を見た。畫は、ヒラキの數葉、小咄が數篇載つてゐる。見た物、外題不詳であるが、内容は「うば」、「御利生」、「人まね」云々といつた小話どもである。此の畫は春期(北齋の前名)たるこ

脚本内容

狂詩集
俗謡・註解
「秘歌國字解」

○畫材の主なるも

角力取、若衆

役者

とが、一圖の模の落款でわかる。或は、笑話の作も、彼ではなからうかと思ふ。

脚本内容のものもある。これは、役者繪に堪能であつた、且つ流行を招致せしめた國貞あたりに間々見受ける。上中下三冊もので、一冊に一曲づゝ、あるまとまつた短い芝居を綴つてゐる。但し口繪は色摺敷葉であるが、これは、大抵は本文の芝居の筋とは關係がないやうである。殊に例外としては、狂詩集やうのものも見受ける。又、俗謡の註解やうのものも見受ける。「秘歌國字解」といふと、まじめなものとは思ふであらうが、さうではない。一三三四五六藏板といふ所からして巫山戯てゐる。此の「秘歌國字解」は漢文に書き流した秘歌やうのものを、和文で註解をしたといふのは、名義だけで、全くの戯々作である。然し此の種のもの、皆變名ではあるが當時の詩人文人の宗たるものの閑筆では無論あらう。其他、此類の儒者或は假儒者側が爲した閑筆の類は尙、種々ある。(但し、此等の「國字解」様ものには、挿繪はない。即ち繪本ではないのであるが、序でに述べたのである。)

最後に、全部を通じて、畫材の主なるものを擧げておかう。
初めは、遊女と嫖客、或は町家の士女がそのモデルである。時には、貴族(大名、公家)のものもある。師宣から春信頃まで然りである。嫖客の中には、武士も居れば町人もある。春章の頃になつて、角力取も材料に入れられてゐる。若衆もないではないが、師宣や祐信、政信や豊信かと思はれるもの、若しくは、その頃に多くして、以後はそれ本位、又はその氣分濃厚なものは、殆どない。間々、それを混へてゐるのみである。初代豊國、國貞あたりになると、頗る芝居が多い。役者、若しくは、其他劇作者などにモデルを借りたものが。或は、某俳優の身上に關する奇聞に借りたものも少くない。例へば三津五郎とその妻お傳と、菊之丞の例である。又は、上阪した菊五郎が、大阪の鴻池善右衛門と藝者を争つたことなどが、この取材

東海道物

江戸名所物

浮世節

大津繪節

は、國貞の「上方戀修行」にある。見受けられる。俳優と御殿者などの如きは、謂ふ迄もない事である。以後になると、又東海道物が多い。即ち廣重の「東海道五十三次」各種が聲名を博したのに釣られて、赤繪本式に、この類のものが多し。三保の松原の羽衣傳説などは、屹度世話に翻譯されてゐる。江戸名所物も多い。これは、古くは江戸名所圖會、同花曆らの影響もあらうし、直接は、廣重らの同版畫の影響もあらうが、此の種の中本又は小判一枚繪が多い。其他に於ては、浮世節(ど、一)の流行つた頃に、それを全篇採り入れた物や、或は大津繪節の繪本に借りた物が現れてゐることなどは、謂ふ迄もない。以上、見聞に任せての略述である。概念として大過なくんば、幸はひである。

第二章 浮世草紙系の會本

西鶴の性慾描寫

好色年男

好色赤烏帽子

好色囃紫、好色玉
子酒

好色兵揃

普通の年表・書目類に、好色本として取扱はれてゐるものの中にも、この會本物と見てよいものは多い。例へば、西鶴のものも此の傾向があるが、その性慾描寫を極端にした、さうして此の好色本流行の氣分を突詰めたものには、「好色年男」(元祿八年)や「好色赤烏帽子」(元祿八年)などの、自分の見ただけでも、零本ではあつたが、十何種がある。繪は平凡であるが、文詞はである。さうやつてまだ品よく、胡麻化したものらしい。とにかく、普通公表目録、非公表目録類の中の、「好色」は、これと睨むべきが多い。殊にこの元祿八年前後のものは、畫家も筆耕も、(作も畫も)といつてよいかも知れぬ。又表紙題簽の感じも同類で、しかも異種がある。繪などは大まかな描線で、感じのいゝ事、素敵である。文詞の文字も、大きい。版元は、どうも却つて江戸版が多いやうな氣もする。(現に、「好色赤烏帽子」の如きは江戸版)此の類は、同じ年代でも、「好色年男」の類とは感じが違つてゐる。「年男」の類は、まだ上方系統で、西鶴の浮世草紙の本格に近く、それを一層會本化さうとしたのが、この「赤烏帽子」系のものであると思ふ。「好色囃紫」「好色玉子酒」なども、その中の、最もよき標本である。——が、この類零本の見聞、また系統だつた記述の出來ない事を恨む。(が、すべて零本が由來多いのである。)

「色里三所世帯」の舊版木を使用、章を補ひ、畫を殖し、畫も摺を入れた。(此の部分新刻)會本化した五冊本「好色兵揃」の如きも、無論、浮世草紙系のものである。(但しこれは、大阪版である。)がまた×と×

祐信描く
其蹟
○「艶色玉簾」上巻

目録

の露出せられた男女繪を描いてゐない。閨房を描いた繪も、西洋の艶畫の如く、その多くの如く皮肉に掩蔽して、暗示してゐる。それを露出させ、しかも内容、文詞に於て、浮世草紙風と思ふものは、西川祐信描くものである。作者は、其蹟の筆であらうし、即ち後期浮世草紙系の會本である。その中の目録の二。二は、大本三冊の「艶色玉簾」である。畫は、祐信である事は、畫様にも現れてゐるが、序文にも西川氏とある。(この序文は、署名、無し。)目録は、すつかり、浮世草紙風である。(それも、其蹟物の)。

目録

【金】言耳に逆馬乗出した三枚肩

おして廊の大門打ついた太夫の床

帯紐をとけしない口舌の詰ひらき

また地女とは各別世界天神の間夫狂

鹿戀女郎にかへろくと

ないて別れる田舎客

【銀】梨子地磨琢のよい色茶やの懐子

初心な男をこつほりと手に入た局遊び

鯛の雀肴もうまい床の口添酒

香込で取持する仲人口鼻が背の程

夜更てから忍て来る妾者の隠男
覺てからは忘れぬ戀のいろは
お師匠様を付て廻す

舞子の風俗

本文

といふので、これは、その上巻の目録である。本文は、「二」太夫職の風俗。「三」天職の風俗。「四」鹿戀女郎の風俗。「五」端女郎の風俗。「六」妾者の風俗。「七」色茶屋娘の風俗。細かい見出しがあつて、それに、一々短篇がある。(以上、上巻内容)すつかり普通の會本とはちがつた、所謂まじめな花柳風俗資料の多いものであるが、局部の描寫は、會本である。挿畫も、無論會本である。

本文抄

〔七〕の色茶屋娘の風俗のうち、初めから、無事な所まで抄記してみる。以て風格の一斑が知られよう。年中あそびに事かゝぬ都なれや、東邊の景色、四條の板ばしわたれば、自然と心わつさりと成て、主親のよまい事も、内の山の神に、脚布でしばらく苦しむも打忘れて、先ひがし石垣京やの門口目にかゝりて、大津屋の上娘、帳やの娘も何方の佛師の御作ぞ、つる子持姿、よいものは誰目にもよい鳥が、かゝるを待て、色茶屋の娘の風、又すてられぬ物ぞかし。色事斗は唐も天竺の茶屋の亭主、おさなき娘を養ひて、老さきは是にかゝる思案、目利にちがひなく、此娘發明にして、器量はうつし繪の楊貴妃をあざむき、手管はかゝへの山州に見習ひ、つるもなりそふに見せかけて客をもがせ、十人よれば八人は此娘にほだされ、此家は娘が手管にそのはんじやう、近所の色茶屋の亭主共、我子にあの娘の手管を見習へと、異見の引ごに成ぞかし、その比天の川原のはやり子、珊瑚珠之助とて、一枚有板の御太夫、此娘と

相ほれの首尾は成やすく、二階のはしご

ねてもさ

めても珠之助戀しく思へど、親の秘藏子なれば、中居小女郎にいひ付て、娘の目代多ければ、そのゝちは梯の首尾もならず、娘はたゞ此事のみ心にこめて目をまはせば云々。

文は、其積であらうか。晝は、祐信として初期と覺しく、大柄な、のんびりした男女である。

次に、枕本形式のものとして、殊に贅作を明らかに記したものの一例として、左の如きがある。殊に、面白いのは、その巻一に現れた、家婦と娼婦との優劣論である。即ち、これを主題にして紹介したい。

X

自笑の名の作(その實は、其積)、祐信晝の「情ひな形」(枕本、五冊カ)といふものである。その巻一は、けいせい風であるが、その本文の冒頭(これを【序】としてゐる。)は、家婦と娼婦とに對する男の氣持を區別して、當然な話ではあるが、古今誠に穿つた推論である。近松などは、その戯曲に於て、かうした心持に於て、不言に作した。自笑(實は、其積)などは、不洗練ながらこれを文字に現してゐる。それだけ、近松などは詩、自笑は散文、形だけではない、頭腦でもあると斷じたい。

「情ひな形」序

序 太夫と間夫と客の目を拔俄盲

諸國里々浦々迄に遊女とて、男の心をなぐさむる女をこしらへ置ぬれ共、京江戸大坂三ヶの色町におよぶ所さりとてはないが定なり、其中にわけて都は女郎の生れつき、各別艶にしてゆたかに、よはく

としてから底心のつよく、自然とくらゐそなはれり、さればいつの世から女良と云事を掃初て、人の心をなぐさめけるぞ、尤金銀にて買ける物に定め置ながら、其男眸といふ物にならずしては、我物つかひながら、おかしからずして、しかも氣の毒かさなり、たとへば××に入りはならべながら、心にあはねばふるといふ事、是常の女とは上したのちがいあり、×取て男のかざがすると、はや目の色がちがふて、こころも空に待ちらるたる地女をなけやりにして、つめひらきのむつかしきけいせいをすけるは、よくよくよい所がなふては、此金銀の大切な世に、あればとてめつたにはすてはせまじ、いかさまにも太夫といはるゝ程の器量は、きせる盃の持やう迄も常に替り、抑は賤しき者の娘なれ共、歴々につきあい花車事も見なれ、哥よみ琴をひき、又は香を聞覺へ、筆とつての文がら、よしある人の息女といふ共、何をひとつ見おとす事もなし、さ程にようはこしらへおける事ぞ、浮世の戀といふは、面影を見初てより其傳手を聞出す迄に心くだき、□□と仲立をもとめて又文に身をやつし、數くつかはしけるに封じめもきらずかへされ、又は其人の手にもわたさず、下々にて引さがされ、笑ひ草に成て其儘すてられし事かぎりなし、されば女良は姿を道中にて見すまし置て、その名をさしてよびにやり、心のまゝに成事扱も氣散じ成戀ぞかし、金にてならぬものならば、世に人の命は有まじ、器量のよき男にもなづまず、法師年寄にもかまはず、身は賣物と斗心得て、きのふはきのふ今日はけふぎりに、其日の大臣の氣を取れば、是がおもしろかるまじき筈がなし、此うまき女良の味に喰付ては、手前の内儀の手もりもいやに成て、むしやうといふ物にさはぎ出しては、着のまゝにならねば、やまれぬ物なり、又女郎にも間夫といふ物を仕覺へては欲の事も徳の事も目に見へず、身の爲になる大臣を脇になし、我は裸に成てもかくし男に喰

付ては親方のこわい顔も、やりてが異見も聞ものにあらず、是程思案して見るにがてんのゆかぬ事はなし、然らばけいせいといふものは、町の徒なる奉公人よりは欲のないものとしられける。

(以下、さる歴々の太夫殿、あけやの又市といふ料理人と年をかさねて念比せられ、………と話の本筋に入るのである。)

作者畫者明示
貽信と自笑

此本、まだ年代、作畫者等の明示せられた頃のものとして、好標本である。序の末に、大和繪師西川祐信筆、作者八文字自笑とあつて、正徳二年辰ノ新春とある。尙、此の當時は、かゝる本と共に、藥品を添へて賣つたものらしい。現に、この序の中に、姪女堪悦術、一包本の外にそへ申候とある。かうした事が行はれてゐたのであらう。

以下、なほ、この序巻の本文を書きつけておかう。

さる歴々の太夫殿、あけやの又市と云料理人と年をかさねて念比せられ、しのびくゝの文のとおりやり、ゆきちがふ格子に手などしめあひ、人なき首尾を見てひたと寄添ひあいたや………と、ふたりの心いなるに成て、女郎は客のいふ事耳にもいらす、聞がな邊がなと、又市にあはん事のみおもひくらして、座につかるゝよりきよろくとして、あたら太夫様の御目つきが盗人眼じやと、内證しらねば末社どもわきから笑止がりて、あのお目つきはなをされたらよかるふと色外にあらわれぬ、又市は臺所にてまな板にかゝり、めづらしき獻立がな工夫するかと思へば、是も大臣の酒きけんでおやすみはなされてござらぬか、太夫様は小便しに裏へは御出なされぬかと、酒鹽さす所へ酢をいれ、鯉に胡餅をふつて出し、あたら料理のあん

本文

ばいをちがへ、うつゝのやうにてようもく、二年は置もし、動もしつるが、正月買の大きに、人の手たらいで、二階へ下より膳をさしあけしに、すまし汁打あかりて又市が顔にかゝり(手スレ)入りしや、それより、兩眼くり出す程痛、目醫者にかゝりてもはかなくしからず、十五六日して物の美事な盲目と成て、扱もふびんや……今は闇夜にともしびのなきごとし。

これから、この又市、按摩とりに仕立て、これまで料理番で臺所ばかりで働いてゐた身が、座敷へも上り、お客のお相手をして、澤山祝儀も貰ひ、幫間同様按摩半分の身となつた。とこれがその實はからくりで、臺所に働く身では、思ふやうのんびり太夫とも逢へず、窮餘の一策すまし汁を浴びて偽盲目になつたのだ。

そこで大臣客は、金は散々出して、汗水たらしても、間夫の十分の一も眞の姿を見ぬ事、損といふは大抵の僉儀、といふのである。そのまた太夫に迷ふ客があるから、面白いものである。

以上、枕本流行當時の浮世草紙系の一として、紹介する事然り。

第三章 摸洒落本の會本

——「傾城買四十八手」の會本化

「傾城買四十八手」
を踏襲

京傳の洒落本「傾城買四十八手」を的確に踏襲したものの、といふのを見つけた。「戀相撲續十二手」の類よりも、更に明らかなるもの。

序文に左の如くある。

自序

みそじあまりさきつとし、何がしのうしのあらはせし四十八手といへる摺巻こそめでたくもつくりものせしなり、おほろけのすさみとはいへ、けに年ごろあそび女の事のみかゝづられて、ものせるよと、いみじく(や)狂ある文になむ、されどさわる事ありて、わづか其四つ五つを櫻木にえり、そのまゝ事はて止ぬ。今又(虫)××はへをつがんは、あまりにおこのわざ、目もなきくちなわの、人におそれぬさまなれど、つれづれのまに反古どものうちに書つゞりてあるを、文や何がしのかいま見て、木にえりつけん事をせちにすゝめぬれば、いなみがたくて、そがまゝあたへぬ、此摺まきハ、寢夜のかたらひをすまひになして甲乙をつゞりたるものなれば、川竹の流に沈むうかれめ、糸竹のしらべにあそぶ舞姫はさらなり、やんごとなきみたちに宮づかへの女房、深窓にやしなはれし女、つまにおくれし女、あるはことつまをかさねし女、たらちねの目をぬすみて、みそか事せるが、あらわれてかたみに死なんとかたらひしことなど

つゞりて、物語りのとし文とはなしぬ

文政七申のとし

猿猴坊

紅月成

即ち此本、やはり「續十二手」などと同様、例の艶本大作家紅月成の作である。さて此本文政七年と序に年月のあるのは、珍しい方である。上下二冊で、目録は、如左。

目録

- | | |
|---------|-------|
| 一引込手 | 園の梅が香 |
| 一引こまるゝ手 | 隅田川の雪 |
| 一眞の手 | 青樓の月 |
| 一譯の無手 | |
| 一浮氣の手 | |

これで、雪月花の積りである。上巻は、眞の手まで、あとが下巻である。無論、京傳の洒落本が、四十手というても、四十八ないが如く、これも五手だけである。

(引こむ手、引こまるゝ手)好色須木右衛門の後家。おたし、いまだ三十三四。家の娘なれば再縁もならず娘おばちに聲を迎へた。本店の次男色四郎といふので、當年十七才、この色四郎を中心にして、母のおたしと娘のおばちとが、争ひになるといふのである。

筋

合巻資料

この節のはじめ、娘のおばちが、色四郎に見せる新版の草双紙、それに當時の代作合巻の噂が一寸出てゐる、分りきつた事であるが、合巻資料に、抜いておく。

おばち「もしへ、若旦那へ、おとし玉にもらひましたが、新版の草艸紙の團十郎と路考の作で、面白を御ざりますよ、一寸御らんなされましと、云ふ顔のうつくしさ、ぞつとする程かわゆくなり、色「どれ見せなと手にとり、ほんに三舛と路考の作とある。是はみんな代作だらう。なんだか此頃は、草艸紙は役者がいかひ事ある。此ひようしの汐くみの路考は、よくお前に似てゐるよ。ばち「おやくゝゝそをおつきなされまし、此行平こそお前様によく似ておりますと、本で顔をかくす。(下略)

役者名儀の合巻が頻出した噂である。かくいふ此の月成も、本筋の戲作名は、蓬萊山人(二代)といふので、自分名の合巻もあるが、かねて、殊にその初期は、役者の代作を爲してゐたらう。此男、大南北とも懇意であつたのである。現に南北の合巻には、此の男の校合になつたものもある。或は、彼の全部の執筆であつたかも知れない。

右の會話に出でた合巻は、三舛作といふのは、一番太鼓春曙六卷(三十丁)で、初代豊國の挿繪、三舛實は五柳亭徳舛の作、これをいふのであらう。路考の作の、汐くみ云々は、これは、忍強仇汐汲六卷(三十丁)で、路考作實は夷福亭宮守の作、初代國貞の畫である。共に文政六年の刊行である。尙ほ、役者名儀の合巻は、文化十二年頃より出はじめ、此の文政六年は、三舛、菊五郎、路考と三部を出してゐる。以後此の變態文學は、益々流行頻出してゐるのである。役者讚美の男女の心に投じた、一種の營利的出版である。さて命題の「引こむ手」といふのは、色四郎が祝言以前におばちを挑むその手、即ち大小の四ツ切の××

を利用しての事を指してゐよう。「引こまるゝ手」とは、そのあと母親の部屋に呼ばれる。母親の積を押す、その積の介抱が、引込まるゝ手といふのであらう。

(眞の手 隅田川の雪)

その書出しは、頗る正系洒落本の文體を摸してゐる。一寸、抜いてみる。

客八年の頃二十四五、町人息子伊保次郎、上著ハ鳴七子、下ハ鳴ちりめん、貳ツ黒かつさんの羽織、越川仕立の鯨帯。

藝者おやり八年廿一二、上著ハ黒ちりめん唐畫の下繪、水に都鳥を江戸づまにし、下著ハ白紋ちりめん墨繪で同隅田川を書たるを、二ツ帯ハかんとうじまの一尺一寸はゞを半分に折、十の字のやうにすじかひに、あんかにあたりねころんでゐる。客によく懸りて中聲で、上方唄を爪びきでゐる。家根舟にて向島の雪見、尤春の色とみえたり、

うた「ゆくすゑハだがはだふれんべにの花、あんじすごしを枕に語れ髪結ぬ夜の女郎花といふもおくれなさよあらしチャン

客「サアひとつのまねへか、どふもかくれんほハイのう。人がらが能て、どふもいゝ、上方うたの最上だろふ。なぜかあんまり人かひがねへのふ、藝「さよふさ、雪とこれハイつちよふ御座りますねへ、ヲ、手がつめたくなりました、ちつとあたらせてくださいましな、客「こゝへ手を出しなよ、マア一ツ呑ばいゝ、藝「ハイとうけてのむ、(下略)

でこの二人が「眞の手」となるのである。おふくろ(藝者の)や一座の話などが、出るには出る。客は、あ

まり全盛でもない、詰つてきたらしい。

下の卷、(譯の無手、浮氣の手、青樓の月)これだけの一回分である。

さる御邸のお侍と、御用商人の勘太郎とが、駕籠に乗つて、吉原へ出かける。茶やの甘口巴屋へ上る。やがて、お侍は、おいらん那喜川、勘太郎は新造氣の幾と、相方が定る。勘太郎は、廻し部屋である。

「譯のない手」とは、氣の幾と勘太郎とをいふので、新造だから譯のないといふのである。そのあと勘太郎、那喜川の座敷へ旦那の様子を見に來ると、旦那は今方、急用が出來て留守。そこで、浮氣の幕となる。花魁の大事な客人の、屋敷へ御出入の町人(勘太郎)とであるから、浮氣の手といふのである。以上で下の卷終り。下卷最後に、左の如くある。

此兩人眞の色事となり、二階中しれ、大さわぎとなりて、内證の取あつかひになり、那喜川せつかんの處迄、二編の上の卷に出す。

二編目録

實の手

安る手

見ぬかるゝ手

こわる手

近日出版致候

とあるが、未刊なりや既刊なりや、不詳である。(尙、此の二冊本、所々色摺の挿繪がある。不明であるが、初代國貞の筆であらう。内に一枚、念佛講の圖よし。但し此の圖、本文に交渉なきもの。)

第四章 摸黄表紙の會本

—「江戸生艶氣樺燒」の會本化

天明五年の「江戸生艶氣樺燒」が、京傳の出世作であり、一度は黄表紙界の流行兒となり、且つ主人公の艶次郎が、己惚男の一般名詞とまでなつた事は、謂はでもの事である。

由來、當時、その時々々の名作物（正系の上の）と相伍して、必ず會本の類が生れた。現に、讀本の上では、馬琴の八犬傳、これに摸擬したものは、讀本型に、また草双紙型にある。滑稽本の名作、一九の「東海道中膝栗毛」に擬したものには、その代表作として、「膝栗毛」がある。合巻草雙紙物の名作、種彦の「田舎源氏」、これは、永い間の流行を爲しただけ、大本に、半紙本に、人情本型の中本に、殆ど枚擧に違ない程ある。人情本としては、春水の「梅曆」を摸擬した、「梅好」云々の國貞畫の半紙本などがある。見渡した所、その時々々の、正系の上の評判作には、大抵これに伴つた會本の存在があつた。「淨瑠璃物の摸擬作、又はそれより意匠を藉りた類は、これまた無數。よりて略く。忠臣藏もの、無數など、此の例である。其他その世話物に現れた男女は、大抵此の材料である。」轉じて、洒落本及び黄表紙を、その名作物をうけた會本がありや。これは、自分のかね／＼在否を心がけてゐた事であつた。洒落本でも、「當世虎の巻」の金魚作や、末期本流行の最たる「傾城買二筋道」の谷巖作の連作や、これらは、ありさうに思へるが、まだ觸目し能はぬ。（唯、京傳の「四十八手」は、色々形を變へて、會本に見た。その代表的なものは、前章に紹介した通りである。）矢張り人情本に書き直された程度のものに過ぎなかつたかも知れない。黄表紙の

京傳の「江戸生艶氣樺燒」

名作物と會本の交渉

田舎源氏物多し

京傳の「四十八手」物のいろ／＼

「艶本艶次郎」の存在

名作物はどうであらう。其の時々々の當り作は、數々あるにはあつたが、さて何がといふと見當らぬ。純然たる黄表紙型に出来上つたものは、ある。が、黄表紙の流行作のその正本を藉りて、その延長—作り替へといつたものには、未見であつたのである。元來、此の黄表紙は、他の讀本や滑稽本や合巻物の名作と違つて、比較的生命が短かつたのであるし、且つ高々三卷又は二卷（十五丁又は十丁）の短篇でもあつたから、そのみ獨立して、當時に限られた諷刺、漫罵、寫生を擅にしてゐるのであつて、即ち民衆的となるのには、まだ徑庭があつた。一般民心と當時文學の接觸といふ點から考へても、黄表紙の世界は、まだ非民衆的で、比較的高尙で、大通向きであつたやうに思ふ。従つてより通俗的な、普及性を持つた會本類に、その一つだに現れない（。）は、尤もであるやうにも思へた。が、當時、比較的永く、（田舎源氏や八犬傳の、普及性と時間性）には、似もつかぬが、その名を傳へられてゐた、京傳の艶次郎（例の「江戸生艶氣樺燒」）、又はその類の中で、何か一つづらるは有りさうに思つたのである。そのかね／＼の探求が、漸く最近、満足さるゝに至つた。即ち、やはり黄表紙の名作をそのまゝに傳へた（配材の人物名と、結末は、多少の差があるが）ものが、あるにはあつたのである。それが、「艶本艶次郎 全」の一冊であるのである。成程、黄表紙から、その名作をそのまゝに傳へるにしては、矢張り此の「樺燒」であらうことも、他の一般黄表紙の性質と、此の「樺燒」の内容と、及び會本の内容と普及性とに考へて來れば、大凡に肯づけるのである。まだ「艶氣樺燒」であるより、思はれないのである。而も、他の正系の、讀本合巻などに名を材を藉りた屈指に違のない程の夥多出版のものとは違つて、これは、恐らく此の「艶次郎」だけに止まつて、そのまた摸擬作又は類似作は、遂に出なかつたらう、恐らくこれ一本であらうと思はれる所のも

のである。

以下、此の「艶次郎」の内容の一般と、母體の黄表紙「江戸生艶氣棒燒」との比較に及ぼう。

X

一冊、中本と半紙本との中間位るの大きさ。圖九丁、文は追丁にて十八丁まで。別に、文のマシ四丁。計二十二丁。(文のみは十三丁。)初めに、福來□□壽長寶根元の第一丁表があり、其の裏より筋を追うた圖。書き出し、「申さずとも御ぞんじのゑん二郎、よいたおれたるをみすまして、しのぶ喜のすけそらごとも、まぢかねやま云々。ゑん二郎何かわからぬねごとの大ごへ云々。なんだおれがはなをねこがなめる、なめられるはおれがかぶだ。」と例の己惚。喜の助の人物を配してゐる所は、本筋どほりである。但し本筋の「輪留井思庵といふ太鼓醫者あり」といふのは、たうとうこれには現れて來ぬ。圖は、左、寢言をいふ艶次郎。右は、喜の助とそらごと。この妓名のそら言も、本筋とは異つてゐる。本筋では、彼の敵妓は、浮名といふのである。さて、此の艶次郎の留守宅に、腰元のおびわといふのがある。そのおびわを張り込んでゐるのに、手代の助兵へと、丁稚上りのやさの助とがある。第二の圖は、やさの助とおびわ。(正系の「棒燒」に、此の三者の存在なし。)第三は、助べいとおびわ。第四は、艶次郎、廊からの歸り。「ゑん二郎は、うちへかへればこし元おびわ、モシ若だんなさん、けさはきついおつかれどふでもおたのしみだ、かくべつだからとひんとやきかけられ、云々」、「……かこつておくはよしか、助べいはかたいもんだから、あれをつけておいて、きのついたやつだからやさのすけも、一しよにつけておこう云々」。艶次郎を、例の正面の京傳鼻に描いてゐる。第五は、けいしやおまじと艶次郎。「くどきおふせたところはけいしやもまた

「艶本艶次郎」口繪の内容

京傳鼻

欠

MISSING

作の年代

あくる日はふきや町でも、こびき町でも、のぞみしだいにふるまわう。幸ひ呉服ものがきてゐる、かべちよろの帯地、むらさきちりめんのすそもよふ、これはいんきよからしんぜると、手あたりしだいにやりければ、娘は何の氣もつかず、有難ふござりますと、うれしさ顔にあらわれ、いそ／＼すれば……。「てめへをもらつておれが御しんぞ様にするから、そふおもやは、目出度忍にしなりけり」といふのである。以上で、圖と説話をあらまし終つたのであるが、性質が性質だからとはいへ、とにかく或る一人物を中心にして、其の筋が続くといふのは、此時代の此の種としては、珍らしい方であると思ふ。

表紙、青表紙、題簽は、中央に、五字、下に全とある。畫作、不明であるが、畫様よりすれば、榮之であるかと思ふ。年代も、本筋の「艶氣樺燒」の出た天明五年、間もなく、その好況につれての作と見るべきであらう。尙ほ、此の本、きん／＼と云々、例の金々先生の金々を、或る氣分の形容にも使用してゐる事を述べておく。

第五章 會本の大人國と小人國

異國巡りのいろいろ

大人國巡りを會本に見

不器用又平畫一泉湯新話

大人國巡りは朝夷異國巡りなどの逆であるが、(朝夷は、主に小人國巡りで、彼の得意さを描いてゐるやうであるが。)とにかく江戸期古くから、此の大人國小人國などの空想が、時人に行はれた事は、否めない。現にこれに關する即ち異國巡りの説話物語・小説(匿名草紙)類も古くからあり、それが、小説では朝夷傳説等の類の他、風流志道軒傳(風來山人作)や和莊兵衛(遊谷子・澤井某作)や夢想兵衛(馬琴作)など、各作者によつて描かれてゐる。それが、端なく寔に奇抜な構想の下に、しかもその大人國巡りの一を、正系の物ではなく、會本の一に発見したのである。無論朝夷に村を藉りたものは、會本にも多くあり、末期赤本の一には、奇抜なものを見受けるが、(公刊物末期合巻物の上にも、此の朝夷傳説は、流行で、種々の作がある。)それは、小人國へ行つての説話である。かゝる奇抜な大人國巡りは、正系小説作者の思ひもつかぬ事であらう。思ひついたにしても、筆にするまでには、距離のあるものである。その會本化せられた大人國巡りといふのは、左の如きものである。(なほ、公刊の大人國巡りの類は、一々の説明を略しておく。)物は、不器用又平(初代圓貞)の畫、半本三冊、口繪極彩色摺のもので、「泉湯新話」、恐らく文政頃の板本かと思へる。作者は、何寄實好成述とあるが、誰の變名か。恐らくは、猿猴坊月成、月成と好成と似たり、で此の二世蓬萊山人(二世焉馬と同人。會本作編多し。眞面目な作物も、合巻や相撰本など十數種を見受ける。)の事ではなからうかと思ふ。變名の何寄實好成は、なにより×××すきなりとも訓むべきであらう。

「泉湯新話」下巻、大人國巡りの略筋

善光寺金佛の湯浴

大人國巡りは、其の下冊にある。下は全巻、これのみ獨立して、此の大人國行きを以て、その樞軸を爲してゐる。が動機は、善光寺如來の湯治である。——これも誠に莫迦けた話であるが。今はむかし、じんとくのところ、ちわの助よき、ね公といふものゝふあり、四十になるまで子なきをなけき、日ごろ神ほとけにいのりけるが、此家にせんぞより代々つたはり(たる)わうごんのそんぞうあり、ある夜ゆめまくらにたゞせ給ひ、その方日ごろわれをしんじまめやかなるにめんじ、なんぢに一子をさづくべし、しかしたゞはならぬ、わがぶつたいを豆州あたみのおんせんにつれゆき、ひとまはりとうじさすべしとのたまふとおもへば、ゆめさめたり、ちわの助いきのおもひをなし、すぐさま寶藏より金佛をとり出し、けらいたまき新助といふものにしかくのこをつけ、そのかなぶつをわたしければ、新介はたいせつにしゆごし、すぐさまいづのあたみへほつそくし、おんつけのとほり金ぶつを入湯し奉りける。○この新介がかりきりしざしきのとなりに、年のころはたちぐるのをんな、下女一人をつれ、これもとうちしてゐたり、新介これをあさゆふ見るに、いろしらく、いきで人がらのよいあだなるしろもの、まんざらわるくはないと思へど、たいせつのかなぶつをしゆごしたれば、よそに見なしてうちすぎけるが、女はこの新介が男ふりのどこやら、なりたやにたやうなさむらひ、どふぞあんな男に——と下女をりくそうだんしてゐるを、新介は、いつかうこれをしらす。ある夜あめそほふりて、ものおもはしき空のけしき、新介は、こきやうのことなどおもひいだしてふさぎるをりしも、となりのざしきより、くだんの下女きたり、「さぞおさみしうおいでなさりませう、わたくしかたは、しうんふたり、たれもゑんりよなものなござりませぬ、こよひはわけてあま夜のつれく、どうぞおはなしにおいでなさりますやうと、主人の申

つけでござりますと、いふに、新介もまんざらいやでもなければ、すこしはうさをはらしても、佛のぼちもあたるまいと、すぐに下女にとまはれ、となりざしきへゆき見るに、くだんの女は、すこしよふたるふせい、三みせんをひざへのせて、つめびきにかみがたうたなぞひいてゐるすがたを、つくく見れば、どふもこのまゝではおかれぬと、さすがの新介――

○

圖柄を見ると、女も下女も、成程成田屋（八代目の意か）びいきと見えて、（その實、作者自身の成田屋好みか、又は、當時成田屋に喝采者の多い讀者の心に迎合した作者の意かであらうか）女は、例の瓢箪を紫地に白く散らして抜いた著物、下女は、これも例の青地に白く蝙蝠を散らした浴衣を着てゐる。

でこゝで、下女の計らひで、兩人は慇懃となるのである。をりく、新介、金佛を湯浴みさせる役目を忘れて湯槽での巫山戯ときたのである。然るに或日、椿事出来した。それは、二人が戯れてゐるひまに、うっかり金佛を、前の下水へ取り落したのである。此の金佛も、初めは役目大事と、捧持して湯浴みしてゐるが、けふは、事のはづみで、捧持の手が疎かになつたからである。二人は仰天。殊に新介は、である。で、女も思ふ男の役目の手落と、氣の毒さに、自分にも責の幾分はあるので、二人で、下水から海へ、泳ぎ泳いで、金佛のあとを追ふのである。そのうち、金佛を見失ひ、或る屋形船の男女に、新介ども兩人は救はれる。そこがすでに大人國だつたといふのである。無論船の男女は、大人國のもので、それがをかしい事は、大人國にも江戸があると見え、男の恰好すべて江戸風で、女は深川の藝者らしいのである。その男は、通り者で、幸はひ俺が家に此中着いた新しい棚があいてゐるから、夫婦釋しには、うつてつ

大人國にも江戸がある

成田屋讀本

大人國男女の會話

け。まづ藥でも飲みなと、きおう丸を二粒くれる。やがて新介と女の二人、禮をのべく、疲れたのか、丸藥を枕になし、正體もなく寢入つた。そのあとが、叙述、無稽を通り越して、甚だ面白い。成程こんな趣向もありさうには思へるが、機先を制して、物に現してゐるだけ、此輩作者はえらい。曰く、

「○此内せんどうは、とつかはとさけさかなをたづさへ、もどりきて、もやいととき、とかくしてふねをおきへいだし、うはてをむけてこぎのほるに、おりしもさしほにつれて、はやくも木母寺につきにけり。（大人國にも木母寺があるといふのである。以下同じ。）かくて日本人をたもとへいれ、植木屋奎右衛門が方へ上り、隅田川の春の夕景色を眺め、佳肴珍味をつくし、これにこえたる樂やあらんとしぱらく時を移しけり。中居、モシ旦那、のりびしがたいそうお氣に入りましたね。女、チャなんだへ、そりアのりびしほかへ、そんならわたしにもちつとおくれな、ずるいねへ、重さんひとりおあがりだよ、こりやア此間のよりたいそうおいしいネ、ア、どふしやう、なんだか石のやうな物をのみこんだよ○この石とおもひ、のみこみしは、さきに新介が日本にてうしなひし金佛にて、それがあたみのながれよりこのところへながれ来て、この大人國ののりの中へひつかかりしを、それをあやまつてこの女がのみこみし也○船頭、サア、こんな處で、氣をきかせて、はやく酒はおあづかりといたしやしやう、モシいつものさしきで、ちつとおやすみなさいましト、そこらをかたづけ、件の男は今の藝者をつれて、あちらの座しきへゆく。――女、モシへさつきの日本人とやらはどうおしだへ。男、ム、あれか、それその茶碗の側へ出しておいた。女、チャなにか話して居るよ、そして寒からふに、何ぞ手拭ひ（で）もしいておやりな。ア、お見よ女の脊中をさすつてゐるねへ、實に他所のくにの人は、あん

金佛を嚙みこむ

なに實があるよ、おまへのやうな邪見な人はねへよ。男「そふよおいらはじやけんよ、どうですかねへやつのする事は、どんなにしても邪見だと思ふのよ、なんのこんなかほにうまれずとも事よ、大ぜいの人をまよはせるのは、てへく罪な事じやアねへ。女「エ、にくひ口だのう。コレ此口でそんな事をいふのかト」

で此の大人國の兩人は寢てしまふ。さて新介と女は眼を覺しはしたが、新介がいふには、所詮寶を失くしたこの身、死んだとおもへばまたこの大人國へとらはれ、このまゝひほしになつて根付にされては、日本へ恥の上塗り、此上は二人一處にこゝをぬけいで、また淵川へでも身を投げるが、まだしもの量見、そうじやくと二人は身構へ、枕の上をつたひ、肩の堤や脇腹、といったうちに、怪しや大人國の女の……光明赫耀たるものがあるといふのである。で新介、さてはと、とんだ寶藏へ忍び込んで、首尾よくみ佛をとり返すといふのである。

金佛をとりかへず

痴夢一醒

女「新介さん、まんまと首尾よふ。新「御佛はつゝがなふ。兩「エ、忝ないト。此時下女がこゑにて、「モシく何ぞこはい夢でもごろうじたか、いつそなされてお出なさい升ト、此こゑに目覺し兩人、邊をよくく見れば、やつぱり元のあたみの座しき。新「そんなら今のは夢であつたか。女「わたしも夢を。下女「お湯へお遣入なさいましたいへば、新介暫く考へ、かぶりをふり、新「イエく湯へはいりますまい。」

といふので、落になつてゐる。とんだ咄があつたものである。夢に最後を胡麻化しはしたものと、途中の繪柄は、とても奇抜なものである。とにかくふざけた趣向ながら、下巻却つて珍案奇趣、そして椽大の筆を揮つた國貞と相俟つて、逸品の一であらう。(晩期物ではあるが。)

因みに、此の本三冊、かうした大人國の趣向は、下のみである。上は、植半の春の黄昏、箱根湯元、神奈川宿の長しま屋、といつたもので、それに處々風呂をからませてゐる。中は、蒸風呂、湯船、このあたり、深川氣分らしいものである。——この湯船は、男女の仕切りだけは出来てゐる。當時の實物も、こんなものであつたらう。屋根には、顔剃り屋などがゐると見える。さうした會話が、取り交されてゐる。船の窓から沖、大船の碇泊した遠見がある。座敷を外しては、此の湯船へ来たものらしい。——アト後家と失敗した番頭、他の男女といつた、餘り湯には關係のないらしいものである。

附録の説話は、情事不通の若旦那と、その相手になる或る女房と、その亭主の忘情者との話。牽頭醫者の取持で、怠情亭主は、僅かな金に納得するといつた、双方承知の上の美人局がある。その話が、上巻と中巻とに續く。下巻の附文は、例の金佛の話を、口繪から續けてゐるのである。

X

朝夷の小人國巡り

参考として、朝夷の小人國(附、他の異人國)巡りの末期本の一を示しておかう。

「朝比奈諸國一覽」(三冊物カ)の上によつての記述である。これも誠に意表に出た趣向で、赤本ではあるが、捨て難いものだ。一曲齋まる丸畫とあるから、國曆(三代豊國の門人)の畫であらう。文は、女好庵である。ろくろ首の男女や、半陰陽や、頭部に陰陽のある男女や、様々を描いてゐる。例の鶴の丸の紋のついた羽織を著した朝比奈が、小人島の遊廓をそゞろ歩きする條がある。それが繪になつて、「なるほどこれはきめうだ、かねてはなしにやア聞てゐるが、こんなにちひさからうとはおもはなんだ、づぶしらみのやうだ、

「泉湧新話」上巻中

黒馬宇風落款

エ、それでも女の手を引たり、なにかたはぶれるやつもあるうちがい。アレ／＼むかふのにかいで×××××××たはへ、ハ、ハ、ハ、コレ／＼ちつときをつけてくれ、ふみつぶしさうで誠にあるきにくい。といったもの。長臂國、一名手ながじまと云、といった珍圖もある。隣のかみさんにまで手を出すは、手の長き一徳だとふざけてゐる。乗和國、一名片身國といふのがあつて、「この國の人、片身なるゆへ、足一本にて歩行事に甚だ不自由なり、故に心やすき人といひあはせて、互に手をとりにくみてあるれば、足をはこぶに便利よし、されば、多く男と女と××××、××ながら道をあゆむなり、よその人これを見てもみなこの國の風俗なれば、わらふものなし、去りながらま男などして見つけられ、にゆるとき、あはて、あしのはこびをまちがへれば、ばたりところび、たちまちおさへらるゝなり。」といったふざけたものである。次ぎ、異國情調の男二人、一人は木琴の類を弾き、一人は、毛をあけて踊つてゐる圖があつて、それに、北齋や北齋門下の普通版畫の落款に、往々見受けるやうな、右から左へ、假名で「まるまるかく」とした落款がある。

次に、附文となつて、女好庵の執筆、相當にこなれた筆つきで、朝比奈、戰敗れて、小人國と長臂國へ渡る。小人國での遊廓見物、小人に勧められて、小屋がけ、朝比奈怪しからぬ見世物をやつて錢儲けをする。長臂國では、若い男女が、隣の垣から垣へ、手を伸しあつて、逢瀬を楽しむはかなさに嗟嘆する。人情、何處も異りはなしといふのである。

いづれも此種の會本は、例の淺草の生人形、松本喜三郎などの作によつて、激發されたものであらうか。

第六章 會本の役者最良

芝居と江戸文藝、
會本類

役者似顔繪

役者、ひろく謂へば芝居は、江戸文藝對象の一半（その他の一半は、遊里）である。したがつて、その文藝物の作と畫と一致して軟中の軟に沈澱した會本類にあつても、その主材又は背景に、をり／＼これを見受けるのは、當然の事である。配材又は、其の一部にこれを用ゐたのは、無論多量である。が主材にしても、配材にしても、凡て役者讚美の心持から湧いてゐる事は、當りまへである。さうして、時には讚美を越えて憧憬的に移り、或は、篇中に、或る美男のモデル、代表として、當時の名優を使用してゐる。其他様々の場合があらう。例へば、春章の繪本、初代豊國の繪本（無論此種の物）などには、役者似顔繪の大家であるだけ、斷りなくして、當時の名優の似顔を篇中の男女の男に使用してゐる。

さうした數々の中より、稍特色の著しいもの三種、年代順にこれを列擧し、解説してみよう。一は、配材に使用程度が、その殆ど全部であり、且つ、それが西川祐信の繪本であること。二は、當時の一名優（三世菊五郎）を殆ど主材にして描いたもの、且つその逸話ともいふべきものである。三は、偶々際物的性質を帯びたものであるが、中に小唄文献上の或る資料を含んでゐることなどから、此の三者を選んだのである。

版は、第一は、恐らく八文字屋本であらう。第二は、江戸版、第三は不明であるが、大阪出來のものであらう。

(尙、此の記述は、後掲、「根本仕立の會本」とも交渉が深い。あれは汎い意味の芝居物であるが、また此の役者讚美も其の一部を爲すからである。)

第一、役者紋と名を入れた西川繪本

第一、役者紋と名を入れた西川繪本

「西川筆の海」

「西川筆の海」といふものである。枕本、藏本は、三冊の合本後摺らしく、京枕・大枕・江枕とその丁附にある所から見れば、初摺本は、京枕、大阪枕、江戸枕の三冊本であらう。遊里本の如く、これに、鄙と湊とを入れた五冊本では、恐らくなからう。「西川筆の海」といふのも後摺合本の折の命名であらう。初摺は、「好色三箇津枕」とでもいふのであらうか、類似の書名を、斯種目録類に見うけぬ。畫家は、無論祐信である。墨一色摺で、各枕に、附話二三篇あること、如例。

此の「西川筆の海」、毎丁に、右上又は左に圓形で版を削つた跡が見えてゐる。初めは、何の意味であるか分らなかつたが、其の中の一圖に、削り残つたものがあつた。それは、紋の一つである。で、凡て毎丁初摺にあつた此の紋を再摺時に削つたのだと思へた。何の紋か。これは、人物の詞書を見るに及んで、容易に分つたのである。即ち凡て當時三ヶ津の名優を意味したので、その紋をまた毎丁掲げたのである。それが、再摺時に、如何かの事情あつて、紋だけを削つたものと思ふ。其の事情は、詮索するに由もないが、役者側の抗議からか、又は、書肆自らの發意か。或は、此の再摺が、稍年代を違へた後の事で、従つて、初摺當時程には、役者利用の興味が観者でない所からの削除、但し少部分の詞書に現れた役者名だけは、仕方なく其儘残したといふのか。恐らく、さうした事情であつたらう。

三巻の役者の名

とにかく初摺本と此の再摺本との差は、紋の削除のみだと思はれる。初摺の年代は、恐らく寶永頃かと思はれる。といふのは、内容の詞書に現れた名優が殆ど此の寶永を堺してのものらしく見えるからである。圖柄の説明は略いて、各々の枕に現れた役者(詞書の上に現れた。——それも大抵は、相手の女性の口から洩れてゐる。)の名を列挙してみよう。

江戸枕。

丸市。市九。勝山。□澤。(上の文字、手ズレにて不明。玉澤か。それにしてもしかる役者名見當らず。)

竹。

京枕。

嘉門。八重。

大阪枕。

中村。長十。嵐。市山。民四。小ノ川。嵐。

の十四名が見られる。此の所據本は、再摺合本であるから、無論初摺本は、これ以上に丁數に於ても多く、従つて役者名も尙多からう。(例へば、京枕の如くであつて、これなどは、明らかに殘缺だと思へる。)此の中、興味のために、此の斷片的、暗示的に叫ばれた役者名を、その正體を、出来るだけ詮索してみよう。

扱、そのうち、江戸枕の五者はさつぱり分らない。最後の竹といふのも誰の暗示か分らぬ。お分りだつたら、教へて頂きたい。(唯、勝山は、敵役の勝山善五郎かとも思ふが、江戸だから何ともいへぬ。)京枕二者の中、嘉門、これも不明である。その他の一、八重は、萩野八重桐を斥してゐること、疑ひなから

役者名の詮索

う。圖は、公卿風の男と官女風の女性。それを簾越しに眺める他の女性、その詞に、「あれは八重さんぢやないか、さて」とあるのである。

大阪枕の七名は、殆ど見當が附く。中村といふのは、恐らく中村新五郎であらう。次の長十は、是は粉ひもなく、澤村長十郎である。次の嵐、これは、着物につけた紋（隅切り角に小の字）から、嵐三十郎だと判断が出来る。市山、これは市山助五郎である。民四といふのは、無論、民屋四郎五郎である。次ぎ、小ノ川、これは、小ノ川宇源次であらう。

右の如く、列擧の半數にも満たないが、とにかく當時（寶永前後）の名優三ヶ津のを指してゐることは、明らかである。

附文（「京枕」の例）

附文は、例へば、京枕の數葉に就ていふと、「此紋の思はく有」として、その上に役者紋のあつた形跡があり、その文中には、役者は、ホンの話の譬に出て來るだけである。例へば、ある勞咳にかゝつた姫君の話で、

「（前略）ひいきくの役者の噂、姫君は神山が美男にお心をよせたまひ、とやこふとしんきがり給ふ折から、お乳の人の甥に所がら、大和大路に美男のほまれを取て、神山四郎太に似たおとこ、名さへ神木次郎四郎とて、丸に梅ばちの紋を附、いかさまこれほど似たものも有ものかと。（下略）」

といったもので、これは二世神山四郎太郎（後の二世小四郎）を、たとへに引張り出したのである。次ぎの同じく京枕のつゞき、此紋の思わく有、の中では、「善惡一荷になふもつかうの紋所、顔だち坂東彦三に生寫し」云々とある。

祐信似顔の初めか

第二、菊五郎と鴻池の朝宮

凡て寶永頃の立役、女方などに材を藉りたもので、附文は引例に用ゐたまでであるが、主體をなす口繪の方は、それ／＼或は、その役者の似顔ではあるまいかと思はれる。即ちそれ／＼、或は、該役者の特徴を取つて描いたものではなからうか。すれば、此の寶永頃の西川祐信筆、またしんに似顔を描いた、即ち似顔の濫觴、西の祐信もその尤にゐるとでも謂ひたくなりはせぬかと思ふのである。とにかく再刷合本ではあるが、當時いかに役者讚美に愛身をやつしたか、それが此種のものにも現れてゐて、面白いと思ふ。

第二、菊五郎・鴻池の朝宮

「上方戀修行」半紙本三冊の人之卷一冊に據る記述である。畫者は又平（初代國貞）、作は、不詳であるが、月成（二世馮馬）であらう。先づ梗概を述べる。

初丁表（扉）は、妾のお春に腮鬚を抜かしてゐる鴻池。「君ならで唯（誰）にか見せん梅の花、いろをも香かもしる人ぞ知るもしらぬも逢坂の、關のにしなる大ぶけん、こがねの浪もうち寄する三國一の好色か、名も開の池次右衛門とて、大夫天神引船仲居藝子は元より、地者まで、金に明石のうら千鳥、あるが中にも妾のおはる云々」とある。此の丹と妾との痴話喧嘩に、すでに開の池馴染の藝子の雪野が現れてゐる。

上方戀修行下巻
藝子雪野

次ぎは、ヒラキで、お春と菊五郎暗示の役者との出會ひである。此の二人の對話で、「こちへのほつてきた男であり、「むかしはこちらの藝子上り、今の丹那のおめかけで、今ではおいへさまにおなりなされた」女であることが分る。

次ぎは、挿話の體で、藝子のお雪（雪野）とお花、お花の色男十三郎、三人炬燵の睦みがある。

次が主眼の、菊五郎と鴻池と雪野との三角關係である。圖は、手拭類に、絞袴を腰に佩した男達風のいく五郎(菊五郎)と、大盡風、煙管を手に持った鴻池(開の池)と、中に挟まり胸組思案の體の雪野とである。

(前略) 雪野は一人り物案じ、かくとも知らず治右衛門が、コレ雪野、わが身はなぜかやうにふさぐじや、又いく五郎が事を思ひ出してか、コレふいへばどふかいく五郎をそねむやうなれど、いづはあれが身のうへ話をしてきかそうと思ふていたが、よいおりから、もつとも一ヶ年に千兩や、千五百兩のかねは手にとれど、しつてのとふり、どうらくしやうばい、しばしの間やどをかすばかり、百でもよいごしの錢はなへじや、ことに旅がけの身にもおうせぬけい子ぐるひ、この正月からこのかたあふかたはあけづめ、わしのはり合、聞ばこのごろ身うけもきまり金三百兩のうち、五十兩手附をわたしたけな、それゆへにかいかゝりのしやくせんも出来、どこもかも不沙汰となり、がたびしするやうす、五十兩ですらそのとふり、まじていまにもわが身が爰を出るには、ないてもわろとも二百五十兩と、あと金、天から降か地からわかふか、ぬすみせうより外はなひ、サアよいおともつてお仕合と、おもしろをかしくのしうち、一ト間に立聞いく五郎、モウかんにならぬとからかみ引明、ぬつと出て、

【いく】なんだ、さつきから聞いていれば、たのみもしねへ身の上のたなおろし、コレ雪野だまつていてはわからねへ、ものをいへコレかねはわきもの、いつでも出来るは、なんごたア、かねびらよしてくれ、おれも男ダ、りつばに身うけて花の東のすいけの花とながめて見せるは。【治】チ、おもしろい、大金だして見事に身請してみい、うりやなすびをかうやうにもいくまいわい。【いく】なんだと。(下略)で、こゝで喧嘩となるのである。それを宥めに仲へ入る雪野の困惑といったものである。

次ぎが、右が「開の池の金ぐらの内」左が「親のじゆつかい」といふので、右の金ぐらの内は、圖は、二千兩と百兩とが(各々擬人)、鴻池に使はれてゐるをブツやいてゐるのである。鴻池の好色吝嗇を述べ、

「……何ごともきやうけんだと思へばいゝに、女にほられると思ふて、おのほれてゐるからりやうけんがちがわアな、ちけへねへ、こんなやつの手もとにいて、ころされてつかはれよふより、おたけへにいきどころで、いき／＼とつかわれて見てへのふ、」といつてゐるのである。

次の「親のじゆつかい」は、菊五郎親の述懐である。

もししやばのあにへから、たよりでもありませんか、(此間)かみ十郎がのほりやして、くわしくきゝましたが、とかくにどふらくがやみませぬとさ、ちかごろでは業のひまは向ふ鳥のなんのいんきよとかいふいん居所にいますとさ、」とう時でのいゝ男だから、いんきよ所もいゝが、じんきよしねへよふじんさつしやればいひに、「それにおきゝなせへ、又こんどは大阪でほゝの池とけい子の立入で、女を引とると申事でごせへ升、」どふもせうばいがらで、女がうつちつておかねへからおこる事、いくらでもするはいゝが、しやれにしていなさればいひが、あにへは氣せうだから、とかくこまりやすよねへ、「さやうさ、こまりものでござります、男ぶりのきれいに生れついたも、きやうな人だといわるゝも、てめへ一人で出来たやうに、ひつきやう親があつてうみつつけてやつたればこそ、人にもやれこれといわるゝのさ、ちつとこんなとこいも氣がつくとよふござりますが、そしておまい、よめやめかけがかわへ、そうでござりますよ。(下略)

こゝの繪柄は、雲形の上に、菊五郎親父と菊五郎を見きと呼ぶ若きと、對坐、一見、死繪の感じである。

次ぎ、「幾五郎治右衛門が、けへ子雪野の根びきのこし押し、西と東の力士と力士、花をはらして花々敷ところも名におふ清水、其石坂の立入は目ざましくもいさましく、おりから藝子雪野はかけつけて、二人が中に分テ入り」でトド雪野の言葉で、きつと來春まで待つ事になったのである。繪柄は、力士見立の二人（江戸の三代目三津五郎と大坂の三代目歌右衛門）斷けつけた雪野の後姿。

次ぎは、鴻池の家庭の様子で、鴻池の好色を具體化するための挿話で、手をつけた下女に、浮氣を責められ、胸倉をとられてゐる圖である。

などであるが、扱、此の菊五郎は、何代目であらうか。國貞の畫績から見ても、類推はつく。先づ此の會本、體裁繪柄から、文政末又は天保初のものであらう。と見て、菊五郎を調べると、四世菊五郎ではなく、二世ではなく、三世菊五郎になる。これは、間違ひないが、とすると、此の「上方戀修行」の記述は、彼三世のいつ頃の事態を述べてゐるのか。それに一方、親父の死を内容に示してゐる。彼の親父は、養父で松助、その死は文化十二年である。一方、菊五郎襲名後の上京下阪は、文政三年七月、大阪角座があるが、「上方戀修行」に據ると、正月からの三角關係らしいから、これではない。残るは、文政八年十一月、大阪角座以來、大阪及び京に興行した、即ち文政九年上半期である。これが一つ。他は、文政十二年十一月の京都、南側芝居の興行を始め、天保元年及び天保二年五月頃までの、上方滞在、京又は大阪での興行、此約一ヶ年半の日時である。（尙、他に天保十二年の京、大阪もあるが、これは、此の會本の感じから、此の晩期——天保ではないと思ふ。）此の二者。文政九年の上半期と、天保元年以降一ヶ年半とその距離は僅かであるから、どちらとも斷言が出来ぬ。せめて此の「戀修行」上巻ありて、それに年次（序文の中）で

その年代

三世菊五郎

述懐した親は養父の松助か

も）があらば、斷定される事であるが、今は、此の二者を疑問のままに載せておく。

唯、滿更根のない事は、いかな會本作者も書かないだらうから、當時、此の鴻池と雪野争奪の件は、江戸に於ても評判されたものであらう。無論此の「戀修行」は、一見純然たる江戸版であると斷定する。

此の「戀修行」下の、前に引いた「親の述懐」を考へると、此の親は「男ぶりがきれいに生れついてもきやうな人だといわるゝも」といふ所から、一寸考へると、實父のやうにも思はれる。が、その人物は、風采言語、役者である所から、やはり彼の養父の松助を意味してゐるようか。その相手の菊五郎を、兄キと立てる男、さうして、尠くとも此の文政末以前に死んでゐた俳優は、誰であるか、これも見當がつかない。無論此の兄キは、肉身又は縁つゞきの兄弟の意ではなからう。（尙、此の兩者の對話によつて、菊五郎はすでに當時向島に隱宅を所有してゐた、又、色事にも生一本な男であつた。又嫁の外に妾もゐたことなどが推定される。）

扱、此の鴻池と雪野を争奪した事實が、他にも載つてゐるようか。かゝる事有るには有つたらう。唯、普通の文献にあらうか。私には見當らぬのである。此の雪野といふのも、無論變へ名であらう。

唯、三世菊五郎の先妻は、元中國の某侯の妾で、三男二女を生んだ、（その長女は、十二世羽左衛門に嫁し、その子に五世菊五郎生まる。）その名をきくといつた。きくの死後更に京都祇園の藝子にして、同名のおきくを娶つた、このおきくも幾くもなくして死んだ云々の、この後妻のおきくといふのが、假名雪野ではあるまいか。即ち、或は、菊野とでも藝子名を稱したのではなからうか。（但し、「戀修行」の雪野は、大坂島内の藝子とある。）とにかく分らぬ詮索であるが、三世菊五郎の京阪の滞在、彼の後妻が京祇園の舞子出、これから思ふと、此の「上

三世菊五郎の後妻のきく

方戀修行」の傳ふる、鴻池との張合も、滿更誣妄ではなからう。それにしても此の會本、天下の富豪を向うに廻して、一河原乞食の張合、こゝにも作者の江戸自慢と菊びいきとがあらう。

第三「志幾のゑん」から

第三、「志幾のゑん」から

大阪本の一に、「志幾のゑん」といふのがある。半紙本三冊、口繪數葉、色摺のもの。その中卷三丁裏のヒラキに八代目團十郎の似顔がある。月の出た川ばた、縁臺の手まへ、團扇、螢籠をそれ／＼持った茶屋女ていの二人、別に團十郎の肩にその右手をかけた茶屋女の一人。が、茶屋女といふものゝ、藝子の積りで描いてゐるのかも知れない、が、その中の一人、團扇を手に持ったのは、赤い前垂を締めてゐる。が凡てが、例の蠶〇ぬの繪模様を白く染抜いた浴衣を着てゐる。團十郎は、大眼玉に描いて、手拭を右肩に、煙管を右手、黒い扇を左手に持つて、立つてゐる。三人の女性に、取り圍まれた形、その下、團十郎の足もとあたりに、上方唄として例の團十郎を迎へた、彼を讚美した唄が載つてゐる。(其他に、此圖、詞書なし。)但し此の唄は、普通にいはれてゐるものとは、詞句の末に於て、二三の相違を發見する。今、此の「しきのゑん」の唄を載せ、比較のため、普通にいはれる此の唄を對照させておかう。

上方唄

水てうし、ア、つがもない男月、はつのせつくのはつのはり、あやめ太刀團十郎とかけたのは、人も三升のみすながき、はなもみもあるくす玉の、にほひかんばし名物の、ふじの山から高野の山へ、なんでも名だかきおや玉さんじやといなア。

八代目團十郎の上

八代目歌迎の上方唄の異同

とある。普通にいはれるのは、

つがもねえ男氣の、花の束をはる／＼と、こゝに三升の團十郎と、唐までも人の氣にあふ水にあふ、さぞや色香もふかみどり、明けて乗りこむとらの年、富士の山より最眞の山が、ほんまに名高い親玉さんじやわいな。(「ばやま小唄全集」つこの部)

然るに、「市川團十郎一代狂言記」(演劇文庫) 第三所載) には、

つがもねへ、男ぎの合花のお江戸をはる／＼と、合ことに三升の合團十郎とかうまでも合人のうはさの八代目、合さぞやいろかもふかみぐさ、合親子手に手を肖のとしふじの山ほどひいきの山の、ほんまに名だかい親玉さんじやわいなア。

作 梅 升

とある。「志幾のゑん」の唄は、殆ど後の二者とは別物の觀がある。アトの二者は、少部分の他は、類似してゐる。但しこれらの異同によつて、氣づかれることは、此の唄は、いつの唄かといふことである。

「はやま小唄」の寅のとしては、八代目が自殺した嘉永七(安政元)年の寅をさしてゐよう。とすれば此の唄は自殺以前、上阪の彼を迎へたをりの唄といふ事になる。が、狂言記の唄はどうか、親子手に手をとりのとしてゐる。酉は、嘉永二年に當る。丁度、此年の五月、八代目は上阪、父海老藏に逢つてゐる。それに親子手に手をとるといつた心持も、それである。で、此の唄は、嘉永二年の、彼が父を見舞つた時の、彼を讚へた唄で、無論自殺當年のものではないと思はれる。従つて「はやま小唄」の寅のとしては、訛傳であると思はれる。

此の唄「つがもねえ」の唄の、或は、本の形は、即ち「志幾のゑん」所載のものではなからうか。前に挙げた通り、男月、初の節句、初のほり、(これに、八代目の初上りをかけてゐる。)あやめ太刀、みす、くす玉、凡て五月を意味してゐる。自殺當時の上阪は、閏七月の末である。それに、八代目が、前年(嘉永二年)上阪、親子對面を終つて江戸へ歸り、八月、河原崎座に、看板を挙げた。その下り御目見得狂言口上の寫に、

一(前略)私儀當三月御名殘狂言として、勸進帳相勤、古今稀成大入大繁昌仕り、大阪へも外聞宜しく、五月上旬に彼地へ登り、親共海老藏に對面致し候處幸ひに以前に替る佛にせよろに昔なつかしく(中略)親共同道にて高野山へ參詣いたし(下略)

とあつて、彼自ら五月上旬上阪の事を傳へてゐる。

従來の謬説

とすれば、「はやま小唄」の誤りたる事明瞭、或は前年酉の歳に流行した此の歡迎唄(それも第二種のもの)の年次だけを改めて、此歳又流行したものかも知れない。それにしても、「狂言記」右の唄を載せて、

右、八代目團十郎、浪花へ着の節出來し小唄のよし、瀧の尾新車丈藏書の内より模寫して、此書に加ふ

とあつて、書き方は曖昧であるが、若し此の「浪花へ着」といふのが、自殺當時の嘉永七(甲寅)の下阪を意味してゐるならば、是れ明らかに自家撞着を爲してゐるのである。

唯、事の序でに、此の「つがもねえ」の八代目の團十郎に關した小唄は、自殺の歳ではない、前年嘉永二の酉歳のものであることをいうたまでであるが、それも畢竟、此の「志幾のゑん」に、此の嘉永二年

出版の年代

八代目好み

彼上阪當時の景況をそのまま、如實に唄ひ出したと思はるゝ異種のものを見つけたからである。繰り返していふ、或はこれが本歌ではあるまいか。(然し此の「志幾のゑん」所載の唄、既に他の文献中にも傳へられて識者熟知のものであるのかも知れない。すれば、自分のおく耳を耻づるばかりである。)

序でに——此の「志幾のゑん」の他の繪柄を述べておかう。八代目を暗示したものが、今一つ此の夕涼の景の次ぎ(四丁目裏のヒラキ)にあるのである。繪柄、八代目の似顔が、鎌〇ぬの一人との××圖であるが、その詞に、「なぜにお江戸のしゆは、……よいことやら」。「なるほど女はかみのことだ」などある。

此の「志幾のゑん」、無論八代目初上りの年、嘉永二年の版、恐らくは其の五六月の出版であらう。すつかり八代目好みで、本の表紙も、蝙蝠を三つ組み合せて紋にし、それを散してゐる。その中巻の如き、初丁表から、女性に、白く抜いた蝙蝠の衣を着せてゐる。その圖、上の屋根は、五月を意味して、あやめを賣いたものである、次の繪は、此の女性——扉と同じ衣をした、同じ貌の——に逢つてゐる男であるが、(この男の似顔は、八代目らしからず)その浴衣は、三筋の辨慶縞に白く牡丹を抜いてゐる。これも八代目をかけてゐよう。即ち此の男女の二人、八代目好みの流行浴衣を着てゐる、といふのもあらうか。他の繪柄は、八代目と別物のやうである。附録の文は、小話一篇、これは、八代目を主材にしたものではない。(此の本、上下二冊は未見。今姑らく中巻一冊に據る。)

以上、自家篋底より其の一部の記述。尙、西川本の一に「男色山路露」など、若衆ものも無いではないが、凡ては他に譲り、先づは右の三種に止める。

補遺

補遺

「好色役者枕がへし」

「同」大阪の巻の内
容

前稿第一の、役者紋と名を入れた西川繪本の、大阪の巻一冊だけの初摺本を寫目した。それには貼外題があつて、即ちこの三冊(京・大坂・江戸)は、「好色役者枕がへし」といふ本である事が分つた。後刷本(前稿の底本)は、繪だけを前に集め、文章を後に添へたものであつたが、此の初摺本を見ると、それとは體裁が違ふ。即ち、初めに、目錄(この目錄の中に、役者紋を掲げ、その下に、例の浮世草紙風に、短かい詞で概念を物してゐる。)その目錄の次に、すぐ文章があつて、その文章の間に、ヒラキ繪で、その文章に因んだ、(その文章に現れた役者紋を衣裳に着けた人物の活躍圖)挿繪があるのである。さうして大阪の巻は、此の文章なるもの、都合四篇ばかりである。さうしてその文章の初めは、例の役者紋を二つ又は三つ、(その各短篇中に現れる役者の數だけの、さうしてその役者たち個々の紋)おいて、その下に、此紋の出入有と大きく記し、次行から、此の役者にこじつけた(その實その役者の濡事と思はせるやうに)他の男、その役者に似かよつた名の男が、いろ／＼活躍するのである。即ち大阪の巻の内容を、事實示すと、左の如くである。先づ初めに目錄。次に文章の梗概を示すことにする。(目錄の括弧内の役者名は、短篇からの私の判斷で、短篇には他に擬してこの名をいうてゐるから、この役者名は、明らかに間違つてはゐない。)

好色役者枕がへし 大阪之巻

「同」目錄



此紋ハ 村山にのほり詰た中二かいの女客
見てゐる中にア、いく／＼舟が／＼

(村山平十郎)



此紋ハ 戀の中村床の中さゝめ言
ア、もううつゝぞ／＼夜中の鐘

(中村新五郎)



此紋に 抱た子も手から乳母の人の亂心
丸にいのちも 取てゆけ／＼

(澤村長十郎)



此紋ハ 眸□りニ□□かくのうち
小氣味が□□い／＼
(此行スレ)

(嵐三右衛門)



此紋に 口舌の花か咲た櫻の古文字
介さま□□身あがりに御菓子一折

(市山介五郎)



此紋ハ 民屋百姓の娘迄評判の色男
女中方から暫とかつた稻の丸イお心入れ

(民屋四郎五郎)



此紋に 日頃の本望晴がま敷晝の床
むつ言によどみのない小野川の流

(小ノ川宇源次)



此紋にしつほりと時雨のぬれ色を増た庭の紅葉
是ハ見事な女でい主外ニハあらしが家の紋

(嵐三十郎)



此紋ハ風流娘の戀の哥ふしをこめた竹島
幸の道づれよい事をしやうまん参り

(竹島幸十郎)



此紋ハ妹も姉川にさし合くらぬあい床
つたなからぬ一筆手を取た花掣殿

(姉川新四)

(村山平十郎
が紋)

(中村新五郎
の紋)

(澤村長十郎) (この處、原本は實際の紋を掲ぐ。今は、この文字を以て代へる。以下同じ。筆者。)

此紋の出入有

「同」文章の梗概一

武士の娘、出入の町人と不義をして手打となるところを、母親の情で國を脱け、平産して乳母奉公に出た。その先は、本町の呉服屋であつた。その内の手代に、澤村長十郎に似て、大澤村といへば、且那もおかしき人にて、やはり長十郎と名をよび、仕着の紋にも丸にいの字のを著せる。(以下、役者によそへて情事の男を描く事、すべて此の風なり。役者の事をいふにはあらず。それによく似た、生寫し、影の病かと辯解してゐる。

が、結局、其役者を藉りたるもの、さりとして役者の私生活に觸れたるには非ず。凡て、普通和印本の趣向なれど、當時の人氣俳優の紋をありのまゝ描き、それと擬ふ斗りの男どもを働かせ、即ち陰然たる俳優

讚美、その心にある讀者に媚びたるもの也。)

或る時一家留守で、此の新奉公の姥と、子供とこの長十郎の手代と三人だけでゐた。その折、長十郎が姥を誘發させるため、さる日の道頓堀、さる茶屋の中二階での出來事を話すのである。そのエピソードの中に、村山平十郎が紋付けた男と中村新五郎が紋付けた男が現れる。村山は、茶屋の娘、中村は、濱納屋の下で、その家の女中。その話をいろ／＼して、それに繪本を見せたりして、長十郎が姥を誘發させる。で子供を獅子舞にかづける、といふ件になる。さて色々あつて、此の話の終りは、小咄の落のやうになつてゐる。以下各節の小話、凡て然り。(此頃の和印本、説話の落、多くまた此傾向、即ち小咄風である。)(此の説話の中挿繪ヒラキ二個がある。初めは、挿話に現れる、右が村山男と娘、左が中村男と女中。第二の繪は、一圖がヒラキで、澤村男と問題の姥。)

(嵐三右衛門)(市山介五郎) 此紋の出入有

嵐三右衛門と市山介五郎とによく似た、影の煩ひともいふべき二人の男。それが新地の中町で持てる話。(此間にヒラキ繪、右が嵐と仲居、左が市山と或る山州。)さて「あくる朝兩人の山州より。道頓堀の嵐方へと。市山かたへ見舞の杉折奉書の立文。是ハ はまりと思ひまゐらせ候かしこ」といふので落。

(民屋が紋)(宇源次が紋)(嵐三十郎が紋) 此紋の出入有

やはり此の三人に生き寫しの三人男、打つれだちて鹽町にかゝり、折ふしの時雨を、藪垣のかけに佇む。と木の間の隙から、小座敷があり、それに美しき人さま、年ばへ三十をかしらに三人まで縁先にゐる。そ

梗概の三

梗概の二

櫻條の四

れが請じて兩宿りさせる。と、その主人らしき女は、「去るお人のなれのはて、扱はからき浮世を鹽町に遷れたまふか」と、かねて民四の知る人であつた。他の二人は、女中同様にしてゐたが、これも「都去る御方の思ひ人ながら、おもふてもらふ人の心さま浅きを恨み、此比よるべを此所にかくれ」住むといふのであつた。で此三人と三人、打とける。(此間にヒラキ繪、右が民四と主人。左が小ノ川と女中の一人。)

(竹島の紋)(姉川の紋) 此紋の出入有

一寸前に、物好きなき、いかもの食ひの男の話が出てゐて、ろくろ首の女を妾にする事がある。さてさる歴々の娘ご、姉は廿一、妹は十八。後家育ちである。此の姉妹が、竹島と姉川とによつた二人の男達に戀慕。文を送れど、返事もしない。よりに、仲人辨の才覚で、折ふしけふは愛染の縁日とて、勝曼山への參詣夥しい、竹島男も姉川男も出かけた。そこを見かけて、偽のならずものを雇つて、勾引かされようとする。下女の嘆きで、二人が本氣になつて、ならず者たちを追つ拂ふ。で下女の頼みで、まだ路のほど心もとなし、清水には存じたものもあれば、とそれへ案内してゆく。ムムムといふ落(この間にヒラキ、右、妹と姉川。左、姉と竹島。)

此の大坂之卷一冊、枕本、表紙は、黄土色、題簽は中央、緒の色を著く。

第七章 會本の野暮客描寫

「あふみ八契」

野暮客の描寫辛辣を極む

柳樽でも洒落本でも同様だが、野暮なお客に對しては、多く觀察描寫痛烈深刻を極めてゐるものである。そのくせ、彼等——句作者や作者も、度々此んな目には會つてゐたらうに。こゝに、偶然會本「あふみ八契」の地の巻、「霞ヶ關の夕陽と兩國の歸帆と駒形の落雁の三篇所收。」其一節「兩國歸帆」に、逆も此の野暮な御人體に對する、迫真な一齣がある。

「じんやうのほとり江上の秋風客をおくつて一葉かろく昔間をわくる船のうち酒をすゝめて一曲の月にうそぶく天のはら八重の鹽路のすゑとほく千里の外も限なくて水のよどみもたかき江やみぎはの霧のたえ間よりなほ下もゆる漁火のほのかに見ゆるあま小舟こたふる人もなくかもめをりしりがほにしられけりおかん」(きのふはどこへおいでだ(これからが、例の野暮客の口上、始まりである。))
客藤(きんとう) 兵衛(べいゑ) きのふは無據(むこ) さそわれて京町の角つたへ會席を喰(く) に行たが實によく行わたつてゐる二階の鏝(かぎ) つけから湯場(ゆば) のあんばい料理も太助だから申ふんなしさそふするとなり座敷に川口の夫婦と石町の今の太夫と清元の齋兵衛に池の端の六三が客に来てゐて後座がおなほの三絃で竹銘が笠ものぐるひの一中節さ實に聞事よそれから齋兵衛が三絃で石町の太夫が淺間とりわけ聞事よ(この客、聞事よといふが口癖らしい。)) かん(そふかへそりやき) たふござりましたねへ 藤(その座へかほを出す) とむづかしいからじつとこらへてゐるうちのせつなさ察してくだつし(ならべ) 立て先(は) 「それからおれが相手の女郎に聞たら太夫と齋兵衛は大い

當時の町書者

ろ事だとよ川口ふうふはすぐに歸たやうすさ池の端は直に彌玉へ行つたが全盛なこつちやアねへか
 かん」そしておまへさんは 藤「おらア引をうつと駕籠を言附てもらつてすぐに歸つた かん」うそばつかり
 おとまりなすつたらう 藤「ナニとまるものか坐敷限よ かん」チャきついこつた 藤「コウきつといふ
 は手めへのことだおれもいちばんうらみをはにやアならねへ廿八日のばん羽根川から口をかけてやつ
 たら出てるすだと断はつてよこしたが聞ばるたそうだそれぢやア恨だぜ斯申ちやアをかしらしるが（イ
 ヤ事實をかしいのである。） 中かう兩がへ町のお勝瀬戸もの町のおのぶはせ川町の龜文字已來兩國で豊仲
 豊福豊常豊八百をはじめとして小森のお春三しま長屋のお高大黒屋のおはる野田屋のお歌三河屋のおよ
 ね土手繁龍閑町のおりうよし町のおひろ三光新道のおしけ時分がらの藝者を買て來たをとこだ斯いふと
 年がしれるけれどマア今ぢやア石町でおなみお浦こつちでおまんお傳小さん今の豊常はこんど堅（堅）川
 のが引こませたが其外名あるけいしやにおれをしらねへ奴はさきが恥だそれをかしらしきことをいは
 れちやア男がたゝねへト がいぼれと聞たふうをたませにしてやみさしやべるおかんも箱まはしもあきれてもの
 になるゆへう 藤「コウだまつてらちやアわからねへ、よし原でも仲町でもおれのしらねへ藝者はねへ。
 もうよい かん」なにもかも行わたつて御じよ才のねへおまへさんだから打分て申ますが斯でござります
 ト小聲 かん」なにもかも行わたつて御じよ才のねへおまへさんだから打分て申しますが斯でござります
 になりどふも羽根川ははらひがわるうござりますからそこで内のことわりましたのさ 藤「それでもおれ
 が名をいつてやつたらう かん」サアそこがまちけへでござります ノウ喜助どん 喜「さやうでござります
 あそこへは出しませんから丹那のお名をかりたのだと存ましてそれで断ましたト あはせる買はよんごころ
 藤「そんならそふとさつそく文でもよこせばいゝのに かん」そふ申てあけやうにもひよつと此事が羽根

野暮御機嫌さなる

帯に洋字

川へしれちやアまさか濟ませんからお目にかゝつたら申そふとぞんじてをりましたがおまへさんも又通
 りものにも御似合なさらねへその位なこと腹をおたちなすつちやア日ごろおつしやることかみんな嘘
 になりますよし又十に一ッお氣に入らねへことがあつたればとてそふやかましく世間のけいしや衆をな
 らべたつていかにわたくしの様な蜆ツ貝を見るやうなけいしやだつてそふ耻をかゝせておくんなさら
 ねへでもいゝじやアござりませんかへどふで今までりつばなけいしや衆ばかりおよびなすつたおめへさ
 ん（かういはれちや、御機嫌直らざるを得ず。）だからわたくしのやうな者はたはぬがちでござりますのさ氣
 のつかねへことがありましたらしづかにいつて聞せておくんなはいましたわたくしのやうな小ぞうでもお
 めへさんへ出るといふ事アみんながしつてをりますそれだからわたくしのはぢばかりじやアござりませ
 んやつぱりおめへさんの外聞だト すこし身をよせてよりかゝり小聲になりて（こやられちやア、）「そりやアもふ
 おめへさんの事だからたとへどんな耻でもいとひはしませんがそれじやアあんまりでござりますト
 目には
 みだを見せかけても心の（下略）」
 内ではわらつてゐるなり」
 以上、括弧の中は、予の添書である。因みに此本半紙本、表紙黒地に緋の模様、畫は三面（一章に一圖
 づゝ）、國貞の筆か、文は無論當時此類の大家猿猴坊（二世焉馬）であらう。文政末の作、その此の野暮と
 藝者との圖に、藝者の締めた帯の端が、BVURROXといつた洋字の書かれてゐるも珍だ。（他の二篇——
 夕陽は、役者と御殿。落雁は、男と庵主の尼である。）偶然、當時の兩國情調、實在人物の一端、その臭を
 現はしてゐる所が面白い。

第八章 根本仕立の會本

附 南北と二世蓬萊山人

根本仕立
「雪月花艶本」の三冊

根本仕立のものである。といつても上方版ではない。「雪月花艶本」半紙本三冊、艶二樓好成作、月喜代釜平畫と稱するものである。好成は、月成、二世蓬萊山人事、後の二世馬場、(會本の作名は、普通に猿猴坊紅。月成)その男であり、月喜代釜平は、浮世又平をもじり、即ち初代國貞の匿名であることは明かである。

當る丑の
春新ばん
艶二樓
月喜代
彫工青山
好成
釜平
開釜好
浄仕酒壽色若大
書立淫
呑童
利童
好童
勢手
衆
東邊當木
大東邊當木
利校
泉師次師三取
道畫作

雪月花艶本
第一ばん目序の巻
雲關扉常盤津連中
本町妾宅の場

序の巻、中の巻、下の巻の三冊。見本として、序の巻の表紙體裁を右に掲げる。凡て勘亭流の文字である。といつたもので、中巻、下巻は、唯「雪月花艶本」の左の小見出しが、變るだけである。曰く、「第一ばんめ中の巻、壽留ヶ森の場、月見の場」(中巻)。「第一ばんめ下の巻、新吉原の場、花川戸内の場」(下巻)といふ。裏表紙は、同じく勘亭流。

文政十二モウ
本數
秋
萬
千
大
板元
分
寸
堂

丑年梓
賣升
萬歲
々
葉

と讀める。三冊とも同様の裏表紙である。

元來、會本類に、芝居讀美又は役者讀美の香は、いちじるしい。男性のモデルに、當時流行の俳優が取扱はれてゐたり、或は材料を芝居の人物に借りたりするのは、其の多い寧ろ夥しい事は、敢て不思議ではない。淨瑠璃に材を藉りてゐるものも多い。が、全篇、此の本の如き根本仕立のものは、自分の見聞からは、

會本の芝居役者讀美

「雪月花艶本」序の巻のはじめ

稀である。こゝまでびんきりお芝居すくめなのは、である。別の機会に於て、江戸時代會本類最初から現れた歌舞伎役者、藝題の應用、其の變遷などの概観に就いて觸れたい。例へば祐信、政信あたり所謂變態性的若衆が多いに拘らず、春章あたりは、通常のもので、しかも當時の名優主に立役の似顔に借り、此の文化文政の役者繪極盛期（自分は、初代豊國、初代國貞等の此の時代の活躍を以て、藝術的批判の眼よりはでなく、數量盛行の上から、極盛期と見たい。）に於て、當然この種非公刊物の上にも、熾烈に前代無比に此の影響が現れるのは、言を俟たないであらう。初期會本類の或種は、則ち若衆歌舞伎評判記の體裁があり、（現に祐信？の「山路の露」など）後代國貞輩に至つては、恰も俳優をモデルとせる現實以上の情節の展開である。當初は、離れてこれを材とし批判し、後期は、物と役者と即し、融化し、即ち禮讚心醉の實を擧げてゐる。が此の後期の、役者又は芝居萬能の傾向著しい當時にあつても、此の「雪月花」の如く、お芝居すくめものは、實目少少といふのである。が、此等の全會本の概観、歌舞伎の影響を查ねたものは、他日の執筆に譲る事とする。今は、命題の、此の特殊な「雪月花」の解題にとどめたい。

「雪月花艶本」三冊物である。表表紙裏表紙、作者者既述の如し。年代は文政十二年春の新刻。各冊口繪に五六葉づゝの極彩色摺のものあること、普通本と同様。序の巻。

「本舞たい三間のあいだ上の方一間の家體、いよすだれ、但しあけ卸有り。眞中へさくらの大木。日覆より釣杖大ぶんな下の方淨りりだい、ときはづ連中居ならば、シタイにて幕明く、ト頭取出て役ぶれ有て、前登にかゝり、淨りり

見物の評判

團十郎と最良の女

ウタイ、まちえて今ぞ時にあふく、關路をさして急がん
開十郎 出、ふかせく、ふかせばなしの其さま
源之好 ほん三
に、じくくしたる……

とあつて、（以下猥雑にもじりあり）、宗貞、開兵衛の對話。ト小町姫の登場云々、
「ト文句のうち振よろしく有つて、開兵衛、小町を開の戸あけて入る。宗貞小町と顔見合せ、びつくり。

見物
若し御覽じまし、成田屋はどうも様子が宜敷うござり升ねえ「ハイサわたくしはもうく、何より成田屋が好きてござり升よ。はつや何をうろく見てゐるのだ。ちつと舞臺を見やな「ハイわたくしは向ふの棧敷に音羽屋にその儘の人が見えますからついで、ム、ほんにお前は音羽屋びいきだが、こつちへは出ないから氣の毒だの、それよりまア成田屋をお見よ、あのしこなしのよい事を、どうも此頃は丸で高麗屋がはいつてゐるから、なあ。

と此話のうち色々長く、やがて小町は入り、墨染と三人立廻り、手踊りのうち、成田屋の懐中より、か

んがふの印とびめぐる。
「アレどうぞあの寶物を人に取られないやうにしたいねえ、アレ早く取つてお逃けたならよいなどと、とかく成田屋にばかりひいきする。やがて此見物、極の芝居好ゆる暫し無言にて眺め入り、感心してゐるうち幕になる。

とすぐに茶屋へ行、團十郎をよび、大じやれとなる。
「モシ毎度ありがたう存じ升る。お日和が続きまして「オヤ大分おまじめだね團助さん、もちつと此方

へよつてひろくおしな。サアお前、此方へお出でよ。ほんにいつぞやは、成田さまのごくうをありがたう「へいその節はありがたう。いえもうあれは御開帳の時ので、容易には求められませんがござい升が、お宿の御持病があらつしやると申ますので、さし上げて苦しからずばと、此のお常どんに承りましたら、上げるがよいと申事で。

手代「モシ諏訪さまのお水と、まつ山のやきうさまのお札と、成田さまのごくうは、どちらが效能が多いで御座りませうな。

「ごしゆでんうらさき」それは知れた事さ。成田さまは、今のきよものだものな。昔々「成程これは奇妙で御座り升と、此内藝者追々来て賑やかになる。

「時さん（吳服屋手代の名である）、一番おつかいよ。「イエもう親方の前では、「何のはにかむ風でもあるまい。ねえもし、此男は、成田やさんのこなしは妙で御座いますねへ、そして顔の様子も飛んだよく似てゐるよ」「これは怪しからん、私も親方にも似て居ると、けふ此頃は色事で、うらさき、ござり升が、似なくて仕合せで御座り升。三升「私がちつとのうち御身代りに参りましたい。ホンニ昨日書拔キをおつしやつてつかはされたが、あの時ちと棧敷の事でもめが出来て居りました故、つい後程と申上てそれなりに、いやもう恐入りました。時「もとさんの方から貰ひました。トこれより聲色など使ひ、藝者が歌など歌ひ盃もめぐるうち、此浦里（御守殿である）は、かねて成田屋に首たけほれてゐることを皆承知ゆゑ、此時次郎如才なき男なれば、かねて親方に扇を書いて貰ひなどして使ひものにして輕薄をせしが、けふも呼びてかくの如く大じやれとなる。やがてそれ／＼に此の場を外すと、あとはかの浦里と親方斗り残つてゐる。

云々で、次ぎ、本舞臺三間の間、飾りつけ繪組にてよろしく、しめやかなる台方にて幕明く。

「かの浦里は、とかく親方のこと忘れられず、ねても起きても眼の先にちらついて、時々うわ言のやうにいひ出したりなんぞする。時にかの吳服屋の手代時次郎が時々吳服物納めに來る事ゆゑ、此男成田屋に生寫し、もとより時次郎は下心に、かの茶屋にて一番幕をひきたるは、戀ひ焦れさせて、自分が度々お邸へ出る故、そこで身代りに出て、色にするつもり、大當りにてつひに人知れず色になり、夫が知れて浦里は暇が出る。よんどころなく本町へんに妾宅を拵へ、こゝに圍つておく。……

云々。以上、關の扉のつゞきからは、凡て上巻口繪各丁上部の文字を辿つたものである。口繪、舞臺がりの關の扉の場、枝折の外の小町、内部の關兵衛、屋臺の端に琴を弾く宗貞、外、櫻のむかうに常盤津連中、といったものである。その次が、芝居茶屋の體で、御守殿浦里が正客、取巻の吳服手代時次郎、女藝者、女中、盃を手にした成田屋といった場面。次ぎ浦里と成田屋。次ぎ妾宅に於ける本望達した時次郎と、下町風になつた御守殿上りの浦里。など。

次が本文で、（繪本位からいふと、附文）それが紛ひなしの脚本仕立である。以下抄録する。

本文の脚本

本舞臺本町邊の妾宅にて表かうし戸ならび立、内にあんど有、そのわき出がうし鉢植の梅と福壽草有、木戸の内飛石、縁側のはしにらんを植ゑあり、手水石あり。つめびきの新内にて道具とまる。

ト向ふより道具や彌十、色男ふうの拵へ、とうさんの著物同じく短き羽織、とう更紗の下著ばつちを

はき、すつときて表の戸をあけ、内を覗いて見て、人が見えぬゆゑ、入らうとした足を引こなしあつて、

彌十「はてな留守かしらん、ドレ〜隣の内できいて見ようか。」

ト木戸のわきの方へ行、おくをむきて、

チトお尋ね申したい事が御座います。お隣のアノお石さまはどつちへぞお出でムり升かネエ、モシモシ。(トいひながら首を曲けてきく思入有て、)はてな とばかりいつてはさつぱり分らねえ。モシどこぞへ と申ましたか、湯にでもまゐられましたか、ナニそここのところを

ム、してみればこゝの戸を といふ事さうな(ト思入有て、門の戸を

かに任せてたゞ、奥より)

彦左衛門「アイ〜だれだ〜、エ、めんだうな。」

トうしろの方より家主彦左衛門、ふんごみをはき、かは羽織をきてすつと出て、

エ、さう〜しい、だれだ。(ト顔を見る。彌十も後から戸をあけたので、びつくりする、思入宜しく互ひに顔見合せ、大きに驚き、)

ヤアコ、こなさんは、いつぞや本谷さまから頼まれ、此節尋る最中、うか〜こゝへ来てたゞは、ウ、聞えた、あの鯉登様のお圍ひめかけお石どのと色事だな、よし〜逢たが幸ひ、サアおれと一緒になうしやアがれ(トむなぐらをとる。)

彌十「モシ彦左衛門さま、どうぞ此場は、

彦左衛門「ヤアしようちならねえ、きかねえ〜。」

トつかみかゝる、はらひのけて立廻り有。此内わきの方より時次郎浦里二人帯引結びながら、髪の毛を掻き上つゝ出来て、うかがひ見る、時次郎は此彌十を見てびつくりする、彌十はしらすつかみ合つてゐる、とどこの門の戸をおし仆して、内へはひり組んづほぐれつする、時次郎脇差を取出し、目釘をしめしながら内へ入、あんど引かへし眞つ暗がり、くら暗の立廻り、彦左衛門例のをかしみあるべし。時次郎、すかし見て彌十と心得、大家の彦左衛門が肩先取つて投つてくれれば、肝をつぶし、

ワア、〜引 人ごろし、見物イヨつきぢ引

トそう〜に逃けて行く。彌十おつかける、時次郎跡を追て入る。皆々入る、時の鐘にて道具替る。本舞臺正面三間おつとほし黒幕。木戸あり番屋あり、犬が寝てゐる。

ト向ふより彦左衛門かけ来て胸を撫でおろしてゐる。同じく向ふより彌十先のなりにて肌を脱ぎ、頬冠りしてこゝへ来る、思はず犬の足を踏む、キャントいつてくらひつく。

彌十「エ、いめましいシツ〜」トおつ飛ばし足の指を紙にてしぼる。此内彦左衛門ありあふ棒をふりあけてねらひより、わなわなふるへながら、そばへよる。ばた〜にて向より圍ひ者お石、湯上りの拵へ、浴衣を脇の下に持ち、手拭と糠袋を持つて駈けて来て、彌十とつき當り、びつくりして、

お石「コンハ〜どなた様か存じませぬが、あまり急ぎました故、ほんにまア思はぬ粗相、もし御ゆるしなされて、

彌十「ヤアさういふは、おいしさんか。」

お石、ヤアお前は、彌十さん。オ、うれしやく、何か大家さんと喧嘩をして駆け出しなすつたといふ事を、湯やで聞いて直様来たはな、オ、つめたいねえ。

ト手をとり……

彌十「いろ／＼咄もあるが、爰では人も聞かうし、内へはいかれず、お石……。(以下、露骨な濡れ湯)

……(此内彦左衛門ねらひより氣をわるくして……をかしみあるべし。此時ばた／＼にて時次郎出て来る。折から雪ふりたつ、此様子を聞いて、はつと心づき、脇ざし抜いてかゝるを、拂ひのけ、たてになる。

番屋の内より提灯を出し、

ばん人「なんだ、ト此火のひかりにて顔を見あはせ、

彌十「ヤアおのしや關兵衛、實は大伴のくろぬし。

「ナ、わりやア少將、お石といふは小町ひめか。

ト小町提灯をうち落す、彦左衛門ぶつてかゝる、彌十とつてなける、此處宜しく拍子幕

以上が上(序)巻の梗概である。人物の關係が、傍觀、當事、錯雜してゐて、頭が善くともしつかり呑み込めぬ。ふざけたものである。

中巻以下の略梗概をいふと、

中巻。第一場、女護の島鈴ヶ森の場で、女雲介と權八との出あひ、トド女長兵衛「此の女護の島のみ

せ川戸、女を立るがういんの小蝶」と名のつて現れる。

次に、口繪の部分は、尾の上伊太八に擬へたもの。小間物屋の娘のおのへ、繼母のお悪、おのへの色男伊太八。お悪を棄て、墮落、夫婦となつて隠れ家住ひ、子供が出来るといつたもの。次が、(本文、純脚本體のもの)上州草津道、阪東水右衛門が役人遠宮寅之助の體で控へ、捕手大勢を従へてゐる。稻葉小僧召捕といふのである。處へ鎌倉雪の下の町人玉木や伊太八が妻おのへ、癪が持病で草津へ、湯治に行かんと來かゝるを捕へる。おのへの供の者は、駕をあつらへに跡の宿へ戻した、つい日は暮れるにまだ歸りませぬといふのである。爰で尾の上は辛い吟味に逢ふ。その最中、稻葉小僧は、市の川ゑん十郎にて、鳥井の蔭から現れる。形勢一變。……幕といふ。

下の巻。新内もどきで、傾城若草、明部屋の蒿の者伊之助が許へ忍ぶ。二人で知話喧嘩。年があけて二人が夫婦ぐらし。處へ、以前若草の新造であつた若よしが廓を逃けて來る。匿まつてやる。ある日、お若(若草改め)の留守に、浮氣心を猪之介が起す。立ち歸つた女房お若は、さては今度、若よしを廓を脱けて來たのもかうした譯、前から猪之介と云ひ替した事であつたかと、邪推に邪推。これより惡念萌し、居候の仁三とお若はいんぎん。以上が口繪に關するもので、以下は例の如く、脚本風。

猪之介宅の體で、仁三は簪をもつてそこらを掃いてゐる。表へ子分ども大勢争つて來る。廓の墮落者若よしを兄貴の猪之介が諱あつて匿まつてゐる。いやるないの争ひである。仁三がこれを止めて、まあ／＼と隣の今井屋へ連れて行く。アト、猪之介は氣の毒な様子で脇へ向き、鬚を抜いてゐる。例の如く新内の節廻しで、お若の怨み言。トド喧嘩になつて、やかましいやい、出ていきやアがれ。知れた事さ、いつ迄う

かゝ居るものか。猪之介打たんとするを、若よしが止める。お若逃げる。戸口に仁三が来てゐて、背つきあひ、「跡をも見ずして走りゆく。あと猪之介と若よし、「これからはてまへを女房」といふてゐる處へ、奥より二三人廓の若い者の拵へで飛んで出、取りまく。立廻り、猪之介勝つて、引窓の綱で、みかんのくゝり猿のやうに皆を繋ぐ。此見え、道具ぶん廻す。

正面黒幕一面木場にて、丸太矢來よき處に云々。上の方より大勢以前の形りで現れ、仁三を待つてゐる。仁三とお若、相合傘で來かゝる。前の場の争ひも凡て、お若を引出す爲の、仁三の狂言である。仁三、ッレ當座の骨折しろ、と紙に包んで金をやる。うけとり、有りがてい、皆々向ふへはひる。アト仁三とお若の濡れ云々といふのである。

主材は新内

唯上之卷に於て、常盤津を使つてはゐるが、然しそれも序に應用といふに過ぎぬ。主材は新内である。即ち上之卷は、浦里時次郎、中は尾上伊太八、下は若草猪之介である。(が、新内の本文通りを受け入れてゐないことは、見らるる通りである。)上だけは、口繪以前と口繪の部とアトの本文と、大分筋を入り組ませてゐるが、中卷下卷は、割合に前後が無理がなく運ばれてゐる。唯中の卷の、女長兵衛の出る鈴ヶ森だけは、その卷のアトの部分に些の交渉がない。下の卷だけは此點からいへば奇がない。と尤らしく考へてやる程のものでもないが——。唯我等の、此の本三冊に興味を感ずるのは、當然ありさうな物と思へる物の實物に觸れえたのと、殊にその中の一冊(上卷)が、手ひどく成田屋讚美(中卷の稻葉小僧をゑん十郎といふのも、此の意味に入らう。)かつ江島事件以後絶えた筈なのに、根絶しなかつたお守殿の役者見物、同じく吳服屋手代の取持、といつた幕が、作者の假想ではない、無論實情に近い、當時作者の見聞であらう

成田屋讚美のお守殿の見物

作者月成に就て

と思ふ、此噂に興味が甚だ動いたためである。

二代蓬萊と南北

作者の好成(月成)の二代蓬萊山人後の二世焉馬(但し彼がこの二世焉馬を名のつたのは、文政十一年。故に此の雪月花板行當時は無論、或は執筆當時すでに焉馬と稱してゐたらう。)に就ては、既に「蓬萊山人考」に於て自分は細説する所があつた。(「江戸軟文學考異」所收)。又彼が和印本編者の多作家で諸外題のものあり、文政八年すでに此種の作百部に過ぐと自稱した事其他に就ては、「會本の作畫及年代考」(「新小説」大正十五年四月號)其他に既述した。仍て此處に略く。唯此二代蓬萊山人は、南北とも親しかつた。南北は文政十二年十一月廿七日、壽七十五歳。二代蓬萊は、文久二年七月歿、壽七十一。二人の年齢の差は三十七歳、二世蓬萊が年少である。(現に南北の歿年文政十二年、恰も此の「雪月花」板行の年には、彼は三十八歳の壯年である。)が、此の二人は、一方は戯作の才を以て、一方は劇作の才を以て、彼此相許し、相語つたものらしい。現に、此の「雪月花」の校者、表紙にも示す東邊木とは、南北を斥してゐることは言を俟たぬ。即ち此の根本仕立の物には、流石の名作家の蓬萊も、南北の智慧を形だけでも借りたものか。しかし新内の人物に多く藉り、常盤津を使ふなどは、作者自身の趣味性であらう。新内は、當時(この文政末)新内材料の人情本が多く現れたその流行を追うたと思はれ、或は彼の趣味とも思へるが、常盤津は、彼に「常盤津外題考」「常盤津年代記」などの別著のある事からいへば、當然だ。

話の序でゆゑいふが、この蓬萊の作を南北校、この形を逆に行つたものは、南北の合巻物である。即ち南北の作、蓬萊の校である。(然しこれも實は、蓬萊の代作?)と考へられぬでもないが)現に、文政十一年春新刻の「裾模様沖津白浪」上中下編各二冊計六冊(南北作、初代國貞畫)は、明かに蓬萊山人校と記

南北の作
蓬萊の校

南北孫の龜岳

し、前編上には、蓬萊自ら、推奨の意味の序をものしてゐる。それに「我友。鶴屋南北ぬし云々」とある。(因みに此本、芝みしま町、甘泉堂版。稻葉幸藏物である。前編上の口繪に、「歌舞伎狂言相談の圖」ありて、役者は秀佳、杜若、紫若、作者南北、南北悴の直重。作者南北の似顔は、惜しい哉横顔である。圖中、南北孫の龜岳が、畫家氣どり、本職どぼりの繪具や筆洗をにおいて、紙をひろけて雀を描きつゝある。この龜岳は、此の當時、打見た所七八歳の小兒であるが、畫に巧であつたらしい。無論祖父南北の自慢氣持もあり、従つて誰かの代筆かは知れぬが、此本合巻挿繪の處々に、龜岳筆と落款した小畫を見うける。なほ此の龜岳に就ては、成長後の輪廓も略々分つてゐるから、別に他に於て、くはしく紹介する積りである。)に據つても知れる。

尙一、此の「雪月花」の表紙に偶然見かけた(他は知らず)艶二種……の作者の號から、洒落本作家の例へば「嗜昔の茶居」などをものした艶示樓主人を聯想したが、然し寛政と此の文政では滑稽であり、且つ二世蓬萊の如き二流作家(表看板の作物の上ではである。但し會本類作家としては、質量ともに古今の有數に入れても不當でない。)とは思へぬ。この疑は直ちに霧消したが、すればこの艶二種は、例の京傳の艶次郎あたりの聯想と、それに本義の猿の音とを含ませた、そのもじりかといふ位は、肯づけさうに思へる。冗言ながら附加しておく。

欠

MISSING

和印^下の面割等に顯しあり。瀬川菊之丞は、前々七代目團十郎の岩衆なりしが、此節は三津五郎の若衆になりて永木堀に至り、芝居休みの内は晝夜止りて、袁彦道やら哥留多のと大なぐさみを催す。又ぞろおでんは路考に密通をする。此頃は三津五郎は酒を過し、も絶えなくゆるゑ、おでんもけたるべく思ひ居し所にて、血氣の路考にくつ付きしゆるゑ、おでんは有頂天に成り、餘り派出にせしゆるゑ、三津五郎の耳に入り、弟子も氣をもみ、大混雜に成り、おでんしばらく仲人へ預けられる。其のうち三津五郎の御客、取扱ひ再び永木へ立戻り、元の如く納まる。此の三月狂言は、鏡山にて、三津五郎の岩藤、路考の尾上、草履打の處、路考をぶち殺せくと見物立つて大さわぎ、芝居は古今の大入をして金主は福々。此盆替りに、おでんを連れて、路考は二本松へ欠落。三津五郎は寛仁大度の君子ゆるゑ少しも心に懸けず、先妻のお貞を呼戻し、夫婦仲よく暮し居る。路考とおでんの悪評は江戸中ばかりでなく甲州駿州三河尾張上方まで口々に罵り、種々の落首や川柳にて悪口澤山出来る。路考は二本松より出羽の庄内迄旅かせぎに出る。最早九月も末になり、奥州の陽氣寒く、おでんは路考に別れ江戸へ戻る。供は路考譜代の送り權八一人供して江戸へ下る。(數行削除)江戸へ着してからは、其の氣なく、十月下旬に路考も江戸へ登り、顔見せは木挽町へ出勤いたし、久し振りの顔見せ、大入せしが、七日目に病氣附、(路考)翌年正月七日に病死す。顔見せの巴御前が此世の名残りとなる。

女には稀なちからぞ大根引

路考

辭世

七種に覚えよき名ぞ佛の座

(以上、多話戲草より)

緒、此の三津五郎は、三代目坂東三津五郎(初代の實子)で、永木とは、深川の永木に別墅を有したが故である。「近世日本演劇史」にも、此の三津五郎と菊之丞とお傳との關係に觸れた記事(原「歌舞伎」を抜いてる)。

五世瀬川菊之丞は、三津五郎と、五世半四郎に引立てられたるに、大恩人たる三津五郎の妻と通じ、終に出入することは叶はざりき。然るに、「鏡山」の狂言にて、三津五郎の岩藤、菊之丞の尾上にて、草履打の處になると、此の事を知りたる見物、尾上を打殺してしまへと聲々に罵る。三津五郎は宅へ歸り、妻に向ひ、「今日御見物が菊之丞の事を問男だから打殺してしまへと言つたぜ」と言つたきり、後は何も言はざりき。(歌舞伎) (この鏡山芝居の話「多話戯草」にもある) (この前掲の如し。此文、これと同一出典か。)

四世歌右衛門が中村座へ下りて、「双蝶」に放駒を勤め、彼の菊之丞に濡髪(ぬかみ)の役を振られたるに、永木の親方(三津五郎)に話をして、しろといへばする。聞かなければ出来ぬ、とて愈々看板を上げる前日となり、出入の出来ぬ三津五郎の許へ裏口より入来り、此處の敷居は跨ぎがたきが、據所なき事ありて参りたり。と彼の事を取次に言ひければ、三津五郎は、それはするがよい、すぐ上れ、とて其れより五日の間自宅に留め、自身手を執つて稽古をさせたり。(同)

こゝで、續歌舞伎年代記等によりて、如上挿話の年代を調べて見よう。三津五郎菊之丞の鏡山芝居は、文政九年三月二十日より普請出来——以上、青々園氏「近世日本演劇史」——に付市村座(江戸仕入雜行列)とある中の、中老尾上、菊之丞、局岩藤、三津五郎。といふのに違ひない。即ち文政九年三月以前間もなくにお傳訛びが叶つて三津五郎へ復縁、菊之丞とは暫く手を切つたらしい。「多話戯草」の記述は、この鏡山と

菊の奥州稼(ぎ)ぎとに年代が曖昧だ。記述をうつかり見ると、菊死亡の前年天保二年の事のやうにとれるが、これは他に傍證あつて、謬。鏡山は、文政九年三月のに相違ない。唯、奥州落が不明だ。それが、此の盆替りに此路考(菊之丞)、おでんを連れて奥州二本松へ欠落とは、流石の君子の三津五郎も少々妬けたらう。(但しこの駈落年代不明「多話戯草」には錯誤があらう。やはり後説の如く、この鏡山以後のその年八月の事か。)然し間もなく前妻おでんを納れた所を見ると、おでんなる婦女は、名の如く貞、三津五郎を去られてからも寡居してゐたものと見える。乃ち、餘程の貞實な婦だつたらう。(このおでん、お傳と菊との逐電後は復縁されたものらしい。因みに此のおでんは、弘化四年七十一歳でなほ存命であつたといふ。)さてこの路考おでんの二本松行云々といふのは、歌舞伎年代記續編に、

〔同(文政十一年九月)〕廿一日より、瀬川菊之丞、去年八月頃河原崎座にて忠臣藏大切道成寺相勤、夫より所々田舎を修行して、此度歸府に付き中村座へ出勤なり。

とある、文政九年八月以後、此の十年九月に至る約一ヶ年の事であらう。(この路考の歸府を「多話戯草」は、天保二年十月下旬のやうに記せり。されどこれは恐らく誤りならん。現にお傳は、此の以前に死んでゐる事(體か)らしいから。尙、年代記には、是以前、時々路考が江戸興行を記してゐる。)九年の三月に間男(と)と鏡山

で騒がれたものが、八月間もなきに二人で駈落、一ヶ年目にのめくと歸府、菊之丞も中々女形には似合はぬ圖々しさである。さて、「歌舞伎」に載つてゐる、三津五郎へ、菊之丞が訛を入れたのは濡髪(ぬかみ)の芝居とあるから、それによつて、歌舞伎年代記續編を繰ると文政十三年(天保元年)八月朔日中村座出勤、濡髪長五郎、(こしと)玉照、菊之丞、放駒長吉、芝(か)飯(か)歌右衛門。といふのに違ひあるまい。すると文政九年秋お傳菊之丞の駈落、同十年九月、菊之丞の江戸舞(ま)り、出勤。此の十三年の濡髪一件で三津五郎宅へ訛びに行く

お傳菊の駈落は、文政九年秋

訛を入れたは文政十三年

お傳死す

三津と菊、後期の復活

お傳死す

三津と菊、死亡當時の記事

までは、三津五郎と絶縁の形であつたらう。然るに、三津五郎が、左程怒りもせず、手をとつて教へたのは、昔の同性愛の愛憐がまだ仄かに残つてゐたのか、今でもその氣があつたのか、とにかく、前の噂(お傳と菊との不義の)真最中に、鏡山の芝居がはねてからその晩、妻女に平氣で話したといふ話、(この妻とは、斷落以前のお傳であつたらう。)それらを照合すると、然りながらも、究極の憤りを發し得られなかつた、そこに愛情が彼菊之丞にも不盡に注がれてゐたらうと思ふ。「多話戯草」にも書かれた、お傳が、奥州路の旅より歸府した、それ以後の記事が何れにも見當らぬ。三津五郎には、前妻おていがゐる。菊之丞とまさか話を戻したのでもなからう。すれば、何處をうろついてゐたらうか。即ち其頃、既に死んでゐたと自分を見るのである。(その反證あり。後説。)

間もなく、三津と、菊、所謂三津瀬川の死となるのである。先是二人の晩年の提携は、無論復活せられてゐる。現に天保二年十一月九日よりの河原崎座「松資巴藤浪」で、三津も菊も出場、役割も決定したのであるが、三津は前來の病氣のため休演、菊も不思議と罹病、五六日出勤で止んだと年代記にある。結局、前後しての死である。(此の晩年の交情復活には、お傳の死——その存在なき事が、或は大に與つてはゐるいか。)即ち歌舞伎年代記の續編に、

天保二辛卯年
清尊院實譽秀佳信士
十二月廿七日

俗名坂東三津五郎
行年五十七歳

芝増上寺山内
月界院

無類極上々吉、今和事にては三ヶ津に二人なし。一代當り狂言數ふるにいとまあらず。(中略)葬禮正月九

和泉町より二丁町よし町より通町木挽町表裏五丁目橋より尾日張町通り此日堺町より芝まで見物の群集、神事祭禮の如し。

天保三壬辰年
高照院勇譽才阿哲藝信士
正月七日

俗名瀬川菊之丞
行年三十一歳

本所押上
大雲寺

大上上吉當時娘形若女形所作事其外諸藝に通達し、若手には珍しき名人、京大阪にも此太夫如きはなく纏致よく愛敬ありて、諸人の氣請よく、最良連中も多くありしが、命數の限り是非もなき次第なり。葬禮正月十日、新乗物町より二丁町富澤町村松町藥研堀兩國橋へかかり龜崎町通り、昨日は秀佳今日は路考と見物道路に満ちみちて、其の夥しき事筆紙に盡しがたし。秀佳路考の葬禮を見て、最良連中は勿論芝居好の者又は戯場ざらひの野暮介迄も、後に至りてはかゝる名人出來まじと皆歎きしとなん。(中略)

秀佳路考追善として賣出し絵繪本草双紙數々

三津瀬川上品仕立 柳亭 畫作

三津瀬川法花勝美 縁同山 畫人

葉名手桶忠臣藏 大仕かけ 忠臣藏 狂言畫本

三津瀬川落し咄し對面のせりふ

其外にしき繪等百五十番程も出版せし由、古今の珍事になん。

三津の性格と家庭

三津五郎は、「近世日本演劇史」には、彼の氣質を溫和にして事を處するに公平なりきとある。(尚、彼のくはしき彼、



及び彼の舞臺年表は、同、三世坂東三津五郎の(同書には、彼の妻(前妻)に關して、「三津五郎は、永木(深川)に別居を構へしかば、俗に之を「永木の三津五郎」といへり。彼の妻は二世三津五郎の長女にして、おていといひ、おていの娘(妹)の誤也。封醉)二人は、三世菊五郎と荒(藤)の誤。封醉)川官吉(花友の父)に配せり。三津五郎に養子二人あり。一は四世坂東三津五郎、一は坂東しうか、孰も次ぎの時代の名優たりき。又門下到大吉及び三津右衛門あり、共に道化方たり云々。」とある。話は違ふが、この弟子の三津右衛門もお傳の密夫の一人だつたのである。亭主の若衆——菊之丞を窃んだくらる故、弟子位はお茶の子か。儲、この「近世日本演劇史」には、おていが追ひ出されて、お傳が入つた事は少しも書かれてあらず、首尾このお傳の文字を見ぬから、うづかりすると、挿話として引かれた鏡山や、菊之丞の詫びの一件、裏口から入つたといふ話も、やはりこのおていと菊之丞との事かと思ふ人なきにしもあらずであらう。とんでもない間違である。こゝもと、「日本演劇史」の著者の疎忽といはれても仕方がなからう。

相棒たる瀬川菊之丞の性格を、「近世日本演劇史」から引かう。

「此の時代に於て江戸の女方の先輩なりし者を五世瀬川菊之丞(濱村屋路、亭主)とす。四世菊之丞の女婚にして、俗に「多門路考」といひしが、僅かに三十一歳にして死したり。彼は大男にして足袋は十一文甲高を穿き、不愛敬にて物いひも荒々しく、長谷川町に住して樂屋へ行く道、床屋大勢居並びし前を通りても挨拶なく、人に遇ふも顔を背向けて通る程ゆる、近邊の者憎みしが舞臺にては此の人ほどの愛敬又あるべからず、日頃憎みし者も思はず濱村屋と褒めざるは無かりしといふ。云々。」

お傳の密夫は、後に本夫となつた三津五郎の他に、初め、娘の頃、秋山新三郎、福岡の太府(不詳、家老

菊の性格と風采

傲顔見世番附小傳

某だといふ)清水櫻、再び秋山、飯尾藤十郎、三津五郎、三津右衛門(三津五郎の弟子)、三十郎(關三十郎カ)、七代目(關十郎)、大太夫京樹屋三絃彈、瀬川菊之丞(路考)、路考譜代の送り權八、(以上たわけ草に據る)の他に、尙數十名あつたことは、傲顔見世番附小傳(近世風俗見聞集第四——巷街實説)に悉しく出でゝある。和印作者猿猴坊月成(二世焉馬のこと)、喜代元延治太夫(初代清元延壽太夫)や、娘の頃として音羽幾五郎(尾上菊五郎)なども見えてゐる。尙、これに多とすべきは、お傳の年齢、生年が分明になつてゐることである。曰く、

役者素人 天明六丙午年出生
 古大 淫婦 元文政十丁亥年迄
 地色 金色 四十二年に相成

お傳の年齢と丙午の女

お傳と三津との交際の始まり

お傳亂行の年代

菊と三津との提携

即ち、文政十年(お傳と路考、駈落して、お傳先に、路考あこより歸府した年である。)に於て、お傳は、四十の姥々櫻であるのである。しかも、右に據ると、彼女は、丙午の生れであつた。丙午の俗傳を信するのではないが、時人はそれと知つて、いよく然なんめりと思つた者があるかも知れぬ。とにかく數十人の男を食つた事は事實だから。とにかくまこと古今の淫婦といふべきであつたらう。こゝで前の「たわけ草」の記事に據つて、お傳の性的生活の中、三津五郎との交渉の生じた年代を類推するなれば、巳の年の火事で、三津五郎、永木に別宅を營んだ、十年程は榮耀にくらし、此間おでんの行跡筆紙に演べがたとあるから、此の巳年は、文化六年の己巳であらうと思ふ。以來十年程の亂行とは、お傳の、二十四歳(文化六年)から文政元年の三十三歳頃までのことであらうか。三津右衛門、關十郎、三十郎は此間であらう。菊之丞との關係は、菊之丞が三津五郎の家庭に入るやうになつてからの、文政はじめ頃からであらう。現に、從來團十郎の一座であつた菊之丞が、(これを「たわけ草」は、團十郎の若衆なりとしてゐる。)大和屋勝見(三津五郎)と提携したのは、文政二年の顔見世中村座の「花艶和黒主」の上演からである。(三津五郎と一座

した事は、幼名多門として、此の以前にもあつた事は、年代記にも見えてゐる。自分の謂ふのは、誠の夫婦役者としての意である。現に此の時の、般若五郎妹八重菊のしばらくのつらねを、五代目菊之丞自作として、歌舞伎年代記續編に擧げてゐる。その中にも、

「(前略)當年つもつてまだよう／＼十八歳な、何んじややカに成田の花の兄、突出されたる下手役者(團十郎に追はれたとの意カ)下手な役者は私よ、女子だてらに荒事は何れも様と大和屋の親方さんを力にて、けふお目見えの堺町、歸り新参千代八千代、重る菊之丞(下略)」

文政二年より

異説

とある通り、即ち文政二年から、菊之丞、三津五郎の提携始まると見て可い。時に菊之丞は、自ら曰ふ如く十八歳の紅顔の美少。お傳は、母親同然の三十四歳。三津五郎は、時に四十五歳。(天保二年、五十)これではお傳の狂ふのも所以あるかなであらう。天資境遇相俟つてである。以後此の三角關係が、(本當の三角關係、その角は互ひに相牽くこと甚しく、今日でいふのとは、酷だしい徑庭のあつたことは推量に委す)始まつたのである。(異説——後稿(下)に示す「志多定」の菊之丞の評判記事によれば、三津と菊との接近はなほ以後文政七年頃、菊とお傳はその以後らしい。が、寧ろ如何かと思ふ。即ち文政はじめにすでに三津と菊とは提携同時に性的交渉成り、それが著しく眼について噂に上つたのが、この「志多定」の文政七年頃かと見たいのである。)爾後お傳と菊之丞との亂行が目には餘り乍ら、三津五郎がそのどちらも放逐しなかつたのは、彼が寛大な君子といふよりも、そのどちらにも愛憐の思ひ切なるものがあつたのではなからうか。三津五郎の愛は、お傳と路考とに、等分に放射せられてゐたのではなからうか。又菊之丞もこればかりは諒解してゐて、お傳と不行跡を重ねながら、三津五郎にも慇懃を盡してゐたのだらう。後、お傳路考の逐電で、前妻のお貞を三津五郎が引き入れたのは、寧ろ、晩年女手なくては不自由なといふに過ぎなかつたのだらう。お傳を全く見限つて、貞實なお貞に返つたといふ程の後悔さでもなからう。更にさうした不徹底さ(お傳に對する)と、しかも三津と瀬川との交渉とを窺ふに足る好材料は、文政十三年、瀬川が

菊、三津にも盡す

三津の寛仁

皮肉な會本作者

裏口から謝罪に來たとき、五日も泊めて菊之丞に深切を盡した三津五郎の寛仁な態度がをかしい。菊之丞も、生きるために、こゝを先途と哀れつほく、且つ媚によりをかけたであらうが、三津五郎も晩年、お傳はらず、世間の義理ゆゑ憤慨づらはしてゐたものゝ、その實懐しい菊之丞に謝罪られて悪い氣はしなかつたのであらう。それを一般は寛仁と評し、公平と見たのであらう。然し皮肉なる會本作者は、決して之を單純なる寛仁にはとらなかつた。無論、三津五郎・路考の變態關係に之を結び付けてゐる。(後段「梅樂」(解説参照)遊)

尙、「たわけ草」の詳細なるには似もやらぬが「巷街贅説」の、右番附のをはりに、

淫婦小傳といへるは、天明寛政の頃、芝に名高きお傳と云ひし義太夫節の名人あり。そが門弟にして其業にも秀たれば、師の名をついで小傳といふ。今や戯場役者秀佳(古是樂の男、三代)が妻たり。抑淫婦にしてみそか男多かる中に、路考(三代目路考養子、菊三郎)に密通して其事かくれなく、世の中に斬草となりぬ。さるを何人か戯れつくりけん、顔見世の入代り番附に似せて、其のたわれ男の數々を浮世繪師歌川國貞が筆して寫し出づ。櫻木に載せて専らもてあそぶに、無程其判を禁ぜらる。此番附摺出すの費、百金に餘れりとかや。又利を得ること二百金に過ぎたりと。痴呆たる事にしはあれど、大江戸の廣き他國にはあらず。予も亦癡漢の數に入て、乞見て爰に寫し、後の笑草とはなしぬ。」

筆の序でゆるゑ、秀佳路考追善冊子の眞面目なものゝ代表として、「三津瀬川上品仕立」(初代種彦作、國貞畫)。「善三ッ瀬川法花勝美」(縁間山人作、國芳畫)の二作の梗概に移らう。

三津瀬川上品仕立は、嘗て畫家國丸の生歿年を知る好資料として、齋藤氏により好古堂出版、初期の雜誌「浮世精」第六號にも引かれたものである。その序に「(前略)予近年癡癡にて騒がしき場をいとひ、絶えて芝居を見物せず、そのうへ性質遲筆にて、三行ばかりの文章にも、腕をくみ眉をひそめ、三日もかゝりてやつと成り。それをとらへて知らぬ事を早く書けとは無理承知。わるい合點でほんの間に合ひ云々」と種

「三津瀬川上品仕立」の梗概

彦の言のある際物である。地獄での話で、奪衣婆は、秀佳(三津五郎)の似顔繪を見て、首つだけ。閻魔大王は、路考(菊之丞)の艶姿に夙うから戀慕。それがお互ひとりもつて貰ひたいと、奪衣は路考に秀佳を強頼み。大王は秀佳に路考を強頼み。秀・路考の悪戯で、大王・奪衣が互ひに奪衣・大王と知らずに、暗中の出入がある。だまされたと知つて大王・奪衣の憤激。と秀佳が朝比奈となつて、鬼ども大王を取拉ぐ。とど迎ひ來つて、秀佳と路考と二挺の駕籠に乗り、極樂座へ上るといふので芽出度し。おやぢ橋角山本平吉の版である。裏表紙の裏に、くれて行としを名残や朽はゞき 秀佳。門松のとれて淋しやけさの風 路考。と辭世の句が刻されてある。此の本全文の翻刻は、唯一、尾崎久彌氏校訂同氏編の「江戸軟派書」第四編に所収、既刊せられてゐる。就て看るべし。

「三ツ瀬川法花勝美」の梗概

道 三ツ瀬川法花勝美は、各ヒラキの繪が主で、しかもその繪が、芝居の或る場面で、それにこの秀佳・路考の冥土行を擱ませせてゐる。附會けて、屹度その繪の人物に二人をもつてゆくといつたもの。第一は、平凡な、旅姿の三津と菊。次は桂川の心中の見えで、お半は菊、長右は三津、傍ら夜商人の荷担ぎ姿の地藏菩薩の滑稽さがある。三途の川は無論桂川のもり。次は權八・長兵衛の鈴ヶ森の眞似、雲介が鬼である。次が堀山姥の煙草責めの處、山姥は菊。次は梅ヶ枝の手水鉢。次は、熊谷と敦盛。次は、妹背山の饅頭。次は車曳、時平は閻魔大王、松王は鬼、梅王は三津五郎、櫻丸は菊之丞。何處でも芝居をやつてゐるからか。次は曾我の對面、祐經は大王、十郎は秀佳、五郎は路考。で次が極樂行きでめでたし〜である。裏表紙うらに、秀佳・路考連名の墓石があつて、それに男女の群れ詣つてゐる様を描いてゐる。板元、通油町鶴屋喜右衛門、銀座四丁目川口正藏との合梓。(以上の中、「三津瀬川上品仕立」の趣向は、後の八代目團十郎の追善冊子「明烏夢物語」にも踏襲されて、閻魔と奪衣婆がベテンにかゝるのは、その儘である。但し相手は八代目三升と、坂東しうか「三代目三津五郎の養子」の二人になつてゐる。偶然、八代目

八代目物の「明烏夢物語」にも踏襲

としかつとが、三津と菊との交渉に酷似し、後追の形も似てゐるから、踏襲するにも樂であつたらう。此篇、演劇文庫第三編、八代目團十郎物の中に所収。

「極樂遊」三冊の存在

上巻の梗概

かうした追善冊子よりも、路考・秀佳とお傳の三角關係を痛切に穿つてゐるものは、會本「極樂遊」(女好庵著、不器用又平(國貞)畫カ)の三冊物である。如上まじめな追善冊子では、お傳の影が一向しない。それに秀佳・路考は、いつも仲よく、冥土の道伴になつてゐる。この極樂遊に於てはさうではない。相當に秀佳の嫉妬が搦んでゐる。艶本極樂遊(但し表紙見返しには、三津瀬川極樂遊とある。此の三津瀬川の角書は、三途の川をかけ、その實、三津と菊を現してゐる事は、冗言を俟たないであらう。)の上、第一回、三途の濡事。三途の渉の片ほとりに、色を商ひ世をわたる、無體に引あげ女をあてがひ、錢なき旅人は衣類を剥ぎとる、その業強盗引剝にも等しければ、人仇名して三途川の脱衣婆となんいふ家に、三四年の先の頃から、泊めおかれ、此の樓の流行妓たるお大といふ女あり。(これがお傳である。)或る日のこと、こゝへ來かゝる一人の旅人がある。(これが三津五郎である。)大「オやおまへは大和やの勝見さん、どうしてこゝへお出でだ。かつ「チ、そつといふそちはお大じゃないか、思ひ廻せば三年さき冥土の鬼となつたのが、(これで見ると、お大の文政十年歸府以後の消息が分らないというたが、この天保二年の三年前、文政十二年頃、に死んでゐたのだと見える。假想話ではあるが、作中人物の歿年は大抵正確を保つてゐるらしいから、この話も眞實と見て可からう。……但し「名人忌辰録」では、何に據つたか、お傳(小傳)の死を、文政十一年二月六日とし、壽を三十九としてゐる。壽の曖昧さはいゝとしても、歿年は、どうか。然し自分の類推に近いことだけは、認められる。)大「アイサとふに死んだけれど、おまへを戀しい〜と迷うてゐる内この内へ云々。かつ「イヤモウそつ甘くはいきますめへ、それはお門が違ひやせう。大「アレサなんのばからしい、アノ多

冥土で三津がお大女郎と邂逅する

お傳の死は文政十二年頃

お大と三津の断落

中巻梗概

極樂旅の途中、姪壽に逢ふ

姪壽とお大と逃亡

菊、死んでも戀態
下巻梗概

門さんの事なんぞは、ホニに夢にも思ひはしないヨ。先頃は不圖したはり合で、ア、いふ騒ぎになつたから、詮事なしに少しの間夫婦の眞似はしたけれど、元木に増る裏木なしサ。よくくふかい縁ならこそ、思ひがけなく又こゝでおめにかゝるも二世の縁。先頃の事は堪忍して、どうぞこれから末始終女房にしておくれなト云々。こゝで覆水盆にかへるのである。である夜、奪衣婆の許から二人が断落。極樂さしてである。途中一字の辻堂で、牛頭・馬頭に、お大が、姪婦の彼女としては、頗る嬉しい然し辛い呵責に逢ふ。頗るグロテスクにして、エロチックな場面である。三津五郎(此作では、勝見)は、柱に縛られてゐる。それが夢。

艶本極樂遊、中 第二回、假の妹背

西をさして行く途中、ある廣野で、道を聞いた菅笠、被布姿の男、それが思ひもかけぬ千代本姪壽(清元延壽)だつた。(この延壽、無論清元延壽(初代延壽太夫)文政八年五月廿六日、人に害され、死す、年四十九。即ち此の連中では一番先に冥土へ行つてゐる譯である。)姪壽の案内で、極樂町の入口まで来る。これから内へ這入るのに、女は構ひませんが、男は容易に通しません。役人衆を云ひ拵へる爲、二三日はこゝに逗留と姪壽に勧められて、こゝの旅籠屋に泊る。その晩お大の病氣。これで見ると、作者は、清元延壽も、お傳密夫の倣顔見世番附の一人だつた、あの通りの筋書を運んでゐるのである。たうとう姪壽とお大とが、逐電、極樂町へ逃込んで、道樂寺門前に店を借り、淨るり稽古の看板をかけて、女夫暮し。勝見は、出し抜かれたが、切手なければ後追ひ出来ず、悔し涙。爰に又話變つて道樂寺の和尚は、食欲強姪の悪僧、此程、婆から来た多門(菊之丞)といへる美童を數多の給金で抱へ込んだ。(こゝにも多門生存中の、若女形としての戀態的賣淫生活を取り入れてゐる。)

艶本極樂遊 下、第三回

道樂寺參詣の奥女中が、昔の馴染と知れて、多門と密會。和尚の憤怒。それを宥めて、寺門前の家主雁助が、多門を暫く預る。そこに娘がゐる。これとも多門はいんぎん。この小娘の通ふのが、お大の稽古所

菊とお大と婆婆以
來の對面

三津の復讐

南北の擲き

「風俗壽意姑傳」

お大の方と大名の
三好と小姓の菊彌

「神樂記」はその後

である。多門も暇な身、この稽古場へ来て、婆婆以來のお大との對面。そこで二人の甘いシーンが始まる。處へ大和屋のかつみが、「ア、こゝだ」と漸く尋ね來かゝる。二人驚く。勝見は、お大の鬚を取つておさへ、「またしても性悪女め、ウヌどうするか見てをれ」ト相手を見れど、すつほりとかぶる蒲團に顔見えず。姪壽と思ひつゝふとんをはねのけ、顔見合せ、「ホイ多門か、怒みの程思ひ知れ」云々で、こゝで勝見が變態性の發揮となる。これが多門に對する復讐だといふのである。をりから來かゝる鶴屋閑木(例の怪談南北で、文政十二年十一月廿七日、七十五で歿した。)この男の粹な擲で、多門・お大は夫婦になり、多門と勝見は念者の仲を固める。流石は大作者の擲きうまいもんだ。いよく祝言の場となつて、「三人ン四人ン水いらすと謠ふも法の花がつみ、千代もかはらぬ菊蝶やめでたき春に若々とあいおい祝ふてしめてくれ、チヨン／＼／＼モ一ツ、チヨン」で大尾である。

莫迦らしいものだが、この所謂彼等三角關係の眞に、多少觸れてゐる。比較的にと、思はれぬでもないではないか。

他に、「風俗壽意姑傳」(落書庵景筆著、又平畫)の半紙本、三冊がある。(尚、此のお傳を取材とした會は、死後のものとも限らぬ。彼等の生前に、顔見世番附が出來てゐたやうに、これも文政十年頃のものでは無からうか。(番附は文政十年。お傳は、極樂遊によること、同十二年頃死。))これは主に、お大の方(これにもお大。お傳の變名)と菊彌(菊之丞の變名)の情話である。三よし左衛門時連(三津五郎の變名)といふ大名、その妾お大の方(お傳)、小性小川菊彌(菊之丞)の三人が渦をまく。三よしの殿が、お大の方と同時に菊彌をも愛してゐるのは、三津五郎・お大・菊之丞の三角關係に觸れてもゐる。殿の三よしは上冊に現れ、中冊と下冊とは、主にお大と菊彌の墮落である。この梗概は略しておく。

出版年月は極樂遊は、天保壬辰(同三年)春正月、耕錦堂の出版。(見返しに、この明記あり)。この「風俗壽意姑傳」は不明であるが、お傳、二優の歿前、恐らく文政末のもの、例の顔見世番附の文政十年の頃でもあらうか。現に、「秋菊奇詠粹蝶記」といふ半紙本三冊彩色摺の物は、此の「壽意姑傳」の後編と銘う

鏡山の暗示

補記

竹本小傳としての年代

「鏡山」の芝居は天保二年ではない

「多話戲草」は、年代に錯誤あり

たれ、同じくお傳・三津・瀬川物の一である。(これには、上巻口繪に、岩藤・尾上の草履打がある。無論兩人、鏡山の芝居によつての、例の見物の騒ぎを印象しての作畫であらう。此の岩藤は、草履を持つて打たぬ、奇抜なもの、即ちハリカタを以て打つのである。)さうしてこれには、明らかに表紙見返しに、戊子秋月の年代記入がある。即ちこれは、文政十一年。されば、その前編たる「壽意姑傳」は、その以前の作であらう。此の「粹蝶記」は、「壽意姑傳」に較べてなほ下作、梗概は略しておく。

補記——お傳の年代は、傳説上やかましかつただけ、中々模糊として捉へ難いものがある。自分は、右「極樂遊」の記事に據つて、お傳死亡の年を文政十二年頃かと推定したが、年齢其他にも様々の説がある。現にお傳が、誠の二代目竹本小傳として看板を上げたのは、文政十年であるともいふ。すれば、その以前の彼女の飛躍は、榊喜の名であつたのか。が、(下)に示す如く、文政十年春版「志多定」に、お傳とある以上、お傳(小傳)の稱は、無論古かつたらうとは思ふ。が凡てを、今私は假りにお傳の名に於て統一しておいた。要は、右の如く、小傳と菊と三津との連狎關係を、これを始めて聞かしたといふ點にあるからである。

尙「鏡山」の芝居は、天保二年三月三日よりの河原崎座との一説(東京版)此花第十七枝、其十頁)もあるが、これは私は取らぬ。現に此時は小傳は儘かに死んでゐるし、(自分の推定した通り、並びに「名人忌辰録」からも)それに、芝居が同じやうであつても、三津は見當らず、それに菊がおはつて、團十郎が岩藤であるからである。のと、後稿(下)に示す菊之丞評判記中の草履打云々も、此の本(志多定)の文政十年以前の事であることは、論なく、且又、戊子(文政十一年)と年代明示のある「粹蝶記」上巻口繪の鏡山の草履打もじりからいつても、無論これは、天保二年ではない、私の推定した通り、文政九年三月の市村座、三津五郎の岩藤、菊の尾上の時の芝居に相違ない。従つて奥州一本松へのお傳・菊の逃亡を、此の年(天保二年)とするのは、全く錯誤である。(即ち極言すると、これらは、「多話戲草」の錯誤の多い記事のみに據つた妄斷である。)更には、お傳が三津五郎への復縁を天保二年だといふ説(東京版)此花第十七枝)も、同様に滑稽な謬りだと思ふ。即ち凡て前上の年代は、私に至つて略正確であり得ると思ふ。

(下)

「志多定」正確豊富な文献

連狎事實の指摘の最初

(下)

以下、内容紹介の評判記體裁「役者志多定江戸」の一冊は、お傳等三人連狎の、私の認めてまた最も正確なる且つ豊富な傍材約文献であると思ふ。

元來、お傳三津瀬川の三角關係、連狎の事實は、もはや疑ふべからぬ、明白な事實であるが、自分の前稿は、まだ「多話戲草」が此の物の記事は年代に錯誤があつて、絶対信用はおけない。(と曾本類「極樂遊」などの内容其他からの綜合推定である。が三人連狎の事實に觸れたのは、誰あらう、此の自分の稿が最初であると思ふ。お傳の密夫に菊をいふのは無論從來平凡であつたが、その菊と三津とに想ひ到つたのは、私一人だつた。其後(昭和二年九月)の「愛書趣味」にも、此の三人連狎の記述が某氏によつて爲されたが、これは、やはり「多話戲草」を根據としたので、無論「極樂遊」などの傍證には及んでゐなかつた。最も古いのは、三田村鳶魚氏にも、東京版「此花」第十七枝第十九枝の二冊に於て、竹本小傳と題して執筆があつた。が連狎にははつきり悉しく觸れてゐない。私の知る限り、とにかく此の小傳に關する考證は、私を入れてこの三者だと思ふ。(他に外骨氏編の「有名無名」第一冊の第三十九頁に、蘆葉氏のものされたお傳に關する艶本書目類がある。)そのまた私が、こゝに説き出すのは、自分は勿論、他二氏にも從來用ゐられなかつた、名は知られて、それを紹介せられなかつた、より多く價值のある、三人連狎その前後の様子を、殆ど史實的にもした、特に三人生前中の一冊子を發見したからである。無論、見方によつては、私のいふ史實ではないかも知れない、が私は、少くとも爾く思ふ、信ずる。さうして、これが「多話戲草」の類よりも歌舞伎年代記の類よりも、「極樂遊」其他の艶本類よりも、ピタリと、断片的記録(從來知られてゐる所の)と適中するからである。で、こゝに、此の三人連狎の證索の蒸返しをする。

さて此様に前置を長くして披露するものは、

文政 役者 志多定 江戸
素人 志多定 江戸

「志多定」は一冊物也

といふもので、體裁等、一切、當時行はれた小形横本の役者評判記に眞似たものである。本來の評判記なれば、京、大阪、江戸と三都即ち三冊無ければならぬのであるが、これは、江戸の一冊で完本である。勿論此の本末尾には、後編、京大阪の巻、名古屋の巻近刻とはあるが、これは體裁上、評判記と見せかけたからの偽購で、誠は、この一冊のみだと思ふ。つまり此の一冊の内容から推しての事で、これ以外、京大阪・名古屋には、迎も此の江戸程な、充實した奇抜なお傳的風聞の内容は、無いと思ふからである。即ち此の江戸の巻一冊、全部が、結局、土器お傳の密事に關するもので、當時の役者や素人を、多少名前をもじつて、變へて載せ、役者評判記式に、評語をものしてゐるが、それが一切合切、お傳、又は菊之丞に關係があるのである。つまり役者は、お傳と交渉のあつた役者、素人は、お傳とこれも交渉のあつた素人の意味で、題名の「志多」とは、謂はずと知れてゐよう。(品定をもじつてはゐるが、本義は、志多にある。)特にこの擬評判記、題簽(右掲のもの)にも文政亥十と年代を明記してゐるのが、目つけもので、此の明確なる年代提示からして、本文評判記中の、評語に現れる事實の年代も、その前何年と、略推定が出来る譯である。これを以てピンからキリまで最も正確な三人連押の文献とは謂へないかも知れないが、從來の我等の取扱つた准文献よりは、最も正確であると思ふ。仍りて此に、内容紹介に及ぶ次第である。最後に、此の「志多定」の解題やうの文字を記しておく。

役者 志多定 江戸 一冊
素人 志多定 江戸 一冊

右、小横本「役者評判記」型。表紙黒、題簽柿色の色を著く。題簽は、太き一重の輪廓ありて、細長く右掲の文字の上に、線ありて、文政亥十と右左に在り。序一、本文廿丁半、奥附半丁、計廿二丁、本文第

文政十年版

一丁裏、第二丁表は、ヒラキにて挿繪(此分色摺)。同第七丁裏第八丁表、ヒラキにて挿繪(此分墨摺)。同第十六丁裏第十七丁表、ヒラキにて挿繪(此分色摺)。計挿繪三面。内容、三代目坂東三津五郎の妻小傳(俗傳、お傳)に關する、その密夫五代目菊之丞、其他の評判記。准和印本の一也。

以下、所期の本文に入る。尙以下の記述、前掲拙稿(上)を参照せらるべきは、無論で、すれば、一層豊かに、此の連押事實、お傳の姪婦程度が肯づけようと思ふ。

記述の順序、此の「志多定」の本文内容につれて、それを抜抄しつつ、他の記録類(拙稿に既述したものに據つてその正確さを吟味し、なほ新発見の事實などをこれによつて補足して行きたいと思ふ。

先づ、「志多定」の序を示す。これによつて、これが、表紙だけ見てゐたら、さつぱり譯の分らぬ本が、ハ、ア成程と、お傳文献の一である事が、少くとも納得されると思ふ。

江戸の巻 開品定

花のお江戸の大物(以上一行)おや まおとこの(同)愁閑山と□物好者(同)の御評判を一寸(同)結びわ
た(同)味も能□□す横□□□□□□□□(同)どつこいおさへた盃(同)は御ひいきれん(同)御存じの土器

御見物様へ申上 升

いぬとし三都名古屋表評判記とり急候處何かと手間取候故先く江戸表斗賣出し申候間御もとめ
御覽可被下候 京大阪之部者近日出版仕候

以下が、本文であるが、此の本文を見れば元來此の評判記が、凡てお傳を中心にして、それに交渉のあつた役者素人を擧げて、その評判を殆ど事實本位に物してゐることが、明らかである。以下、匿名なれど、評判記冒頭の、名よせの部分を擧げる。

「志多定」の序

役者素人 志多定

江戸の巻

評言近來發兌の和印

外題によする事左の如し

大極上上吉

惣巻頭

瀬川幾之丞 當時

これでモウ男狂ひの浮氣もおつもり盃

上 上 吉 三松傳之助 實色

大きなもので (ヨ、九字分缺) 幾夜物語

上 上 吉 清澤才兵衛 同

とりかたもいろく手をかへた 十二てうし

上 上 王生傳石 金光

した斗りで金をふまれたは大きな馬鹿三人

上 上 吉 番頭三壽右衛門 近年

こふで有ふとはとくに見すかした千里鏡

上 上 吉 板田伴五郎 榮耀

おかげで給金も上げて貰た 寶合

上 上 上 總今好 金光

取られた金のかずも大方 百鬼夜行

上 上 吉 小の江 幾五郎 實色

ほんとうにほれたしんの色直し

上 上 一番眼十郎 當座

すへせんをくわぬもそんと 四季の詠

上 上 吉 赤山爲三郎 榮耀

このよふに□□は男のない 女人國一覽

上 上 岩見衆三郎 中古

□□□□□□□□ばつ 厂の聲

上 上 士 岩見紫石 以前

おもひいだすもむかしの 袋僧物語

上 上 大和當八 以前

久しくしていたをしつた者は 枕文庫

上 上 喜代本榮治 芋田

二人りでなかよくした 和合いんしつ録

上 上 番頭三壽藏 萩野國亭 故人

二人りとも草葉のかけで 三ツ組盃

上 上 吉 いきり場平八 雷同

しらがを見るに付てもモウいゝ年 男

上 上 番頭しん作 弟子

おあまりをいたゞいた情の こほれ萩

上 上 増本 按州 久治里

もんであじなきに□□る 秘事枕

上 上 士 里見夢助 幫間

よくとりくんだいた 四十八手

上 上 富場おちや助 同

両方をおつとめなさるゝ豆 男

真 上 上 吉 山東三壽五郎 通人

何といわれてもかまわぬが すいこ傳

はやし方の部 (略之)

頭取之部

稻荷清兵衛

千摺萬歳

大々好

(此の好の字を、叶に見えるやうに、旁を長く引張つてゐる。)

(右、簡単な評語の下に、右に線を引いたのは、私の心覚えの和印本である。猿猴坊、女好庵、其他いろいろある。但し無論、全部がお傳物ではない。最後のすいこ傳といふのは、遍妓傳(壽意姑傳とも書く)とかういふ宛字を書いた、お傳坂三津瀬川物の一である。即ち前稿末尾に記したもので、前稿では、文政十年頃と推定したが、文政十年の「志多定」に既にある以上、文政九年頃の出版であることは疑ひない。(尚、此の評語に現れた和印本の中、従来年代不詳のものもあつたが、これによつて、此の「志多定」の少くとも文政十年以前の物たることは、確實となつた譯である。)

なほ、右の名よせの中、實名の分つてゐる——自分で判断出来る程度のもの——だけを、左に實名と對照してみよう。

瀬川幾之丞(瀬川菊之丞)○番頭三壽右衛門(坂東三津右衛門。三津五郎の弟子也)○小の江幾五郎(尾上菊五郎)○一番眼十郎(市川團十郎。七代目也)○岩見衆三郎(岩井衆三郎)○岩見紫石(岩井紫若)○喜

名よせの名と實名

代本延治(清元延壽)〇山東三壽五郎(坂東三津五郎)。

其他、「巷街贅説」卷二所收の倣顔見世番附小傳には、數十人を擧げてゐるが、それと、類似のものも多い。が、實氏名が不詳であるから略いた。

以下、評判記の文句の中、此の三人連押の事實に觸れてゐる箇處だけを抜抄する。年代の推定を此の評判當時の文政九年を基準とする。(此の「志多定」の出版は、文政十の初春の事であるから、即ち記事はその前年九年の事である。)尙評語中の、括弧内の文字は、小生の補註である。

惣 卷 頭

大極上上吉瀬川幾(菊)之丞

(前略)頭取 發端は一昨年(補。文政七年)の春(補。文政七年)あたり、三壽五郎(三津五郎)丈と兄弟ぶんのけいやくありしゆへ、(補)即ち、兩人、同性關係の成立をいふ也。但し此の成立は、此の文政七年頃ではあまりに遅いと思ふ、猛烈になつたのが此頃で、すでに文政初めから在つたと思ふ。前稿(上)参照。お傳丈しつと(嫉妬)にていくの丞(菊之丞)丈を殊の外にくまれしが、ふとした事より打てかわつて深きなかつたり、人めをしのびあわれしを(これで見るよ、お傳丈の密情は、文政七年以後、即ち極く最近の事といふ事になるが、さてどうか。前稿にも述べたやう、今少し古いかと思ふが。)三壽右衛門丈(三津の弟子三津右衛門)に見あらわされ、全くそふいふ事はないと、涙をこぼしてくやしがるゝ所、大できく。それよりいよく言ひつゝのり、とふく三壽右衛門丈よりあやまり證文をとる迄のしうち、しぶとくてよし。それにもこりず、そのうちも三壽五郎(三津五郎)丈芝居へはいらるゝと、すぐにしけこみ、はしこのだん

菊の評列

菊、女房を離縁

へ小僧を「番につけおき、一かいる玉三郎丈の部屋にて、××××をする所、大丈夫にてよし。それより女房(菊之丞の女房の意也。三津の先妻お貞にはあらざらん。即ち、これによれば、當時、菊に女房ありしと見ゆ)が、ひふ(被布)をぬいぞこないしをおちどにして、去ル所、きづよく見へて大できく。そのうち兩國へごとうりうのうちも、始終上州屋又ははまのやにて、聖天さまをだしにつかひ、しのびあふしぐみ、うまい事く。(即ち、菊、三津五郎が豊に女房お貞を離縁したと同様に、また自分の女房を離縁して、縁して、たほ、お傳丈密通をつとけたのである。これなどは、新事實である。)(中略)頭取 去年(文政八年カ)の春、むかい丁へ御出勤のみぎりも、(これ、菊之丞の意也。幸ひ三壽五郎(三津五郎)丈は甲府芝居へおんいでゐるす)この事、「歌舞伎年代記」等に見當らず。「毎ばん打出すと、かこにて、ふた川(深川)へおかへりゆへ、かごの者そこへつけこみ、ゆすられる所、こきみよし。(この深川は、深川永木の、三津五郎の住居をいへるものか。)

「山姥」の時

ぞうり打

(略)わる口山うばの時も、いろくなわるほめが有た。(この「山うば」は、文政九年二月五日開場「河原崎座」桐を勤めた。この時は、團十郎の一座で、三津はゐない。)(頭取此うちしどう、晝もお傳丈と同道にて、高島屋(芝居茶)へ來り、おくの下ざしきで、ぶたいへ出らるゝ迄の×××づめ、おわかいとお達者な事く(略)頭取三月狂言はぞうり打、定めしわるほめも澤山で有ふと思ひの外、さのみの事なかりしが、其うち又例の御病氣(例の御病何の意味か、過淫から来た心神衰弱か。それとも癡疾の類か。後にいふ如く、恐らく前者か)にて御引込ゆへ、しばいも不入にて、さんねんく(此の「草履打」三月、市村座の「江戸仕入難行列」で、)おかやきもち そのびやうきといふもあんまり××××せいだろふ(頭取)その後み、むかい町へおんいでゐる頃は、お傳丈も深川へお返りゆへ(三津五郎へ詔を入れて、)しばらくとふざかりいたりしが、其うち三壽五郎丈には、せん妻を御よびかへしとき、(三津五郎、再びお傳を去り、先月次不明なれど、右にて、文政九年三月)今ははゞかる事なしと、直さまうちへよびとり二かいへかくしおき、

菊之丞の二階へ也。××びたし、かんしんく(略)頭取益狂言のじぶんは、もはや御兩人ながら、高島屋の下ざしきをかり切りにて御とうりう、湯へも一ツ所にはいり、ひるめしもひまさへあれば、かへつて一所にくひ、(七行斗り)それよりとふくするくべつたりにおかみ様にして、(菊之丞の妻とする也)しうち平氣にてよし、すいこ傳(過妓傳也。三津を大名、お傳を妾、菊を小姓に仕立てたるもの也。即ちこれにより此本文政九年頃版也。)を見て、いつかうおどろかす買もとめて、しまつておかるゝ所など、大丈夫なもの、かんしんく「わけしり」それから見ると柳島(誰を指してゐるか。三津が否か。)のは、腹のちがつたものだ。さる本屋が、アノ本をもつていつたら、ありつたけかつて、その人の見ている前で、やぶつてしまつたは、有りがたいじやアねえか 頭取 去年十二月(文政八年十二月)仙女丈の年忌のとき、よん所なく十日ばかりうちを出しておいたといふは表向きばかり、(はつきりしないが、菊とお傳の事であらう。仙女と)やつぱり一ツ所に行っていたれば、おなじ事。それより當はる(文政九年)きやうけんまい、かうらい屋のうちの場にて、三升屋のぼとに、かの番附(これは、微顔見世番附小傳をいふのであらう。)を出されて、りくつをいわれ、くちおしがりてなく仕打、大でき。今度又水戸へおんいでの上よし、(これが、從來年次不明にしてゐた、お傳と菊との旅への逃亡であらう。さすれば、此事、文政九年下半年の事である)お傳丈は、成田へさんけいのつもりで、あつちでおちあふもくろみの所、かんしんく、定めしかのちに、みゝ珍説もムリ升ふがいづれ後編く。

藤藏、伴五郎の評

上上吉 あづ 藤藏
板田 伴五郎

頭取御兩人ともお傳丈へこびへつらひて、身上をあけてもらふ所かんしんく 正月 その代り、ち

三代目菊五郎の評

よつとまねかれたばかりで、顔みせから浪人したは頭取それはどふもじごうじとくと申者、天道さまといふ作者のやくわり、きめうく。

上々 吉 小の江幾五郎

頭取いまだ榮三郎の頃の事なりしが、たがいに相ほれのぬれ事はうまい事く。其後やうく気がついて、さつぱりとやめられた所、今と成ては大できく。(菊五郎とお傳との交渉は、即ち、菊五郎の前身、榮三郎は、三代目菊五郎にて、榮三郎時代は文化六年十一月迄也。同十一月に彼は二世松助を襲名してゐるからである。菊五郎との改名は、文化十二年十一月の事であるといふ。)

上上 一番眼 十郎

頭取 すへせんのはしをとらぬは、男たる者のはぢ、義を見てせざるは勇なしと(略)さすがはお家の荒事かんしんく。

上上吉 赤山爲三郎
小多川道世

頭取 おつとめ半分、しわ□□をされる所、めいわくそふにめへて、きつとうけ取ました。それゆへにこそ年々御出世、給金も次第にあがるとは、大あやかりものく。

上上 岩見 桑三郎

扇連(扇連は、岩井の故からで、即ち桑三郎のひいき連の意味である。)頭取、よくく正した所が、おのが太夫は、全く只□□□□□□□□斗りだといふ事だに、番附や此評判記のうちへ入してもらつては、うらみだぜ、頭取イヤ左様で

爲三郎、道世の評

桑三郎の評

紫若の評判

ムリ升ふが、此ひやうばん記も、××人ばかりでもなく、此一ちまきの人、×でも×なくても、たいら一ちめんに出し升たれば、よん所なくお名をいれましたが、私もその實説はききました。(こすれば、兼三郎たのぢらうか)

上上吉 岩見紫石

頭取 これもぐつとむかしの事ゆへ、今と成ては、つながるゑんの事なれば、きのどくに思わるゝ所、しんびやうく。

上上 大和當八 元山鐵五郎

御兩人共いぜんはおそば去らずゆへ、さだめし。

上上吉 喜代元榮治

頭取 ふしづけくといふては、行てはなれざしきにて、おや子××××××××××らるゝしうち、上りよりもうまい事。(延壽、榮壽の親子を指してゐる。相手に無論お傳である。)

上上 番頭三壽藏 萩野國亭

頭取 お二人りとも、さぞかし地ごくでしゆらをもやして、がき道の飯ではないが、□□□火のやうに

三壽藏(三津藏が本名か)、國亭の評判

延壽、榮壽の評判

當八、鐵五郎の評判

其他番頭などの評判

□□さるゝで有ふとおもへば、ふびん。(こすれば、當時、此の二人は既に故人であつた譯である。)(略)

上上 番頭しん作 番頭もく藏

上上 増本あん州

上上士 里見夢助

上上 富場おちや助

頭取 しん作もく藏あん州文お三人ハ、ほんのおさすりさして、仕打なし。但し夢助文は、随分ときたを聞きました。おちや介丈は、親方のゆるしを受て、兩方おつとめは御太義。(兩方とは、三津とお傳さ、兩方に仕入る意味也。以下にあ)それゆへ、かんでらのほうびを付けました。(道理で、この富場おちや助とある名前の。右肩に、かんでらを小さく描いてゐる。)

眞上上吉 惣巻軸 山東三壽五郎

頭取 誠に當時の大通人寛仁大度の大達者ゆへ、巻軸にいたし升たが、どなたも申分がムリ升か天せい何として江戸ッ子しかしこう成らぬ前に出してしまふか、きれいにやつてしまふと、なをりつばなおとこだが、こけみれんにくつ付けていただけ、とふくこんな事に成た頭取併しそれはほんの岡め八目で、當人に成て見たら愛情に引さるゝといふもので、そふきづよくは成り升まい。此噂世間にはつと成て、門弟

三津五郎の評判

門弟よりいばれて
お傳と別る

こけのやうなれど
夫婦の情あり、と
皮肉る

中よりもいろ／＼やかましくいわれ、よん所なく上州屋の二かいにて、お傳丈とわかれるといふ時、身上の事は、たれにまかせたがよからふと、今出してやる女房へ相談される所、實事師の玉しい(魂)うれいも有て、きつとうけ取り升た、其後ふた川へやつての後も【此の意味不明、深川は、永木で三津と思ふ】たび／＼ナゼ京ばし【誰をいふか。】のでもたのんでおれが所へわび事をして返らぬと、文通する事、どふかよそめには、こけのよふに見ゆれど、夫婦の情有てよし。それでもいよくお傳丈のきづよきゆへ、きれいにいとまの状態やつて、前の女房(お貞也)をよびかへすしうちなど、始終申分なし。今もつておちや介をばゆるいとお傳が方へ行け／＼とゆふ所大でき／＼。【儒者誠に聖人の詞にもふす君子は其罪を憎で、其人を憎まずとは、秀桂(佳)丈の義でひろうて。適れ併優中の君子とも稱すべき人である。】頭取何はともあれ、これが則世の人の勤善でムれば、此本の巻軸にいたし升た。まづは

めでたし／＼

亥初春

作者 四文字舍何天茂

板元 岡屋喜餅藏
伊良猿世話助

後編

京大阪の巻 近刻
名古屋の巻

「志多定」の挿繪

附記

菊と七代目との性的交渉

七代目と菊之丞

以上で、大體、本文の要領は終つてゐる。最後の「亥の初春」以下は、これが、第二十一丁裏で、これ丈半丁である。挿繪三枚分の構圖を謂うておく。

第一の挿繪は、お傳と菊之丞、それを隠見する婆、立派なエロチックである。(色摺)。第二の挿繪は、墨摺であつて、右、三津五郎歸宅の所。中、菊とお傳。左、菊と菊の女房など。第三の挿繪は、三津五郎と菊。此の第三は、立派に兩人の變態性を證明してゐる。これによりて、且つ本文中の三津がお傳に未練たつぶりだつた事や凡てに於て、お傳と菊と三津と三者連押の事實を、認めてゐると思ふ。

いづれ、ゆつくり此の本文に就て、史實を拾ひ出さうと思ふ。右、先づは此の文献の所在を披露する事如斯。

附記。

菊之丞と七代目團十郎との性的交渉。

これは、前二稿と直接關係はないが、菊が三津五郎にたよる以前に、團とあつた事は、挿繪としても出てるたから、此際、菊の變態性を一層明らかにするため、この問題に觸れておく。この團との交渉も事實で、その憑據は、左の如きがある。

男色に迷ふ

ねんじやといふ七代目、その以前は團之助、田之助に浮かれて、その噂世の中に知らるゝわけで、中には、近頃の路考は美しく、娘方の姿好く、器量は殊に麗しく色氣たつぶりありて、一寸見るさへ惚ればえのする女形なれば、菊之丞と初めて木挽町の河原崎座にて、五節句の所作の春狂言、翌日三升は打出してより長谷川町の濱村屋(路考方の意)へ押込み、夕(昨夜)の由縁に、今宵もこゝに遊ばん心にて行きけ

兄弟の契約

「夢ごころ」に出づ

文化十四年三月芝居の事也。

菊之丞は十六歳


菊之丞の宣傳的政策が變態性の最初の相手

るところ、伯父たる豊前太夫は袴を着用し、夕の噂聞き傳へ、濱村屋へ祝儀に來たる折から、三升に出合ひ、さて路考と兄弟の御契約下され候由、我等難有く存じます。只今右の祝儀に参りしところ、幸ひお目に掛かり候て、私の大慶、此の上とも行末長ふ取立ては申すに及ばず、宜しく御願ひ申上げますといふは、傍で聞くさい馬鹿くしく思へど、昔は斯くの如くと人が語りぬる。決して可笑いわけでなし、笑ふべからず。依つてこゝに記すのみ。此の男色のうち、一兩年は端手なる事多くありし、余は略ス。右は、七代目團十郎の逸話を集めた、弘化四未の夏歌舞伎遊人翁(三升屋二三治だといふ)の序のある「夢ごころ」の一節である。(全文、書「歌舞伎百」)此の路考は、即ち年代から考へて五代目即ち、三津。お傳との交歌相手の五代目菊之丞の事であると思ふ。さうして此の團と菊之丞との兄弟契約は河原崎座春興行五節句の所作とあるから、續歌舞伎年代記に現れた文化十四年三月七日よりの河原崎座芝居、その大切五節句の所作事、とある、これに違ひない。(此の年十六歳)路考が元來、五代目菊之丞を相續したのは、文化十二年の十四歳、その後、三津との提携成るの文政二年十八歳との間にこれを查ねて來ると、即ちこの文化十四年三月の芝居にきつかり適中する。それより外に全く此の逸話に合ふべき芝居が無いのである。即ちこれで疑ひない。さうして記録によれば、菊之丞はこの年——文化十四年八月河原崎座興行で、立女形になつたといふことである。乃ちこれも一に兄分團十郎のお蔭であつたのか。とにかくしか程の團十郎との仲を間もなく文政二年頃、三津に替へたのは、團の移り氣か、又は、菊の宣傳的政策からか。或は、菊の我儘根性も手傳つて、かたくであつたらう。とにかく菊が變態性の最初の相手は、どうも團だつたらしい。而もその時は、十六の蕾の花だつたことは、肯がはれる。以上。

會本雜考 畢り



このところにはつかうしよのけんいんぬきはにせはんです



もしけんいんのないものがありましたらおしらせください

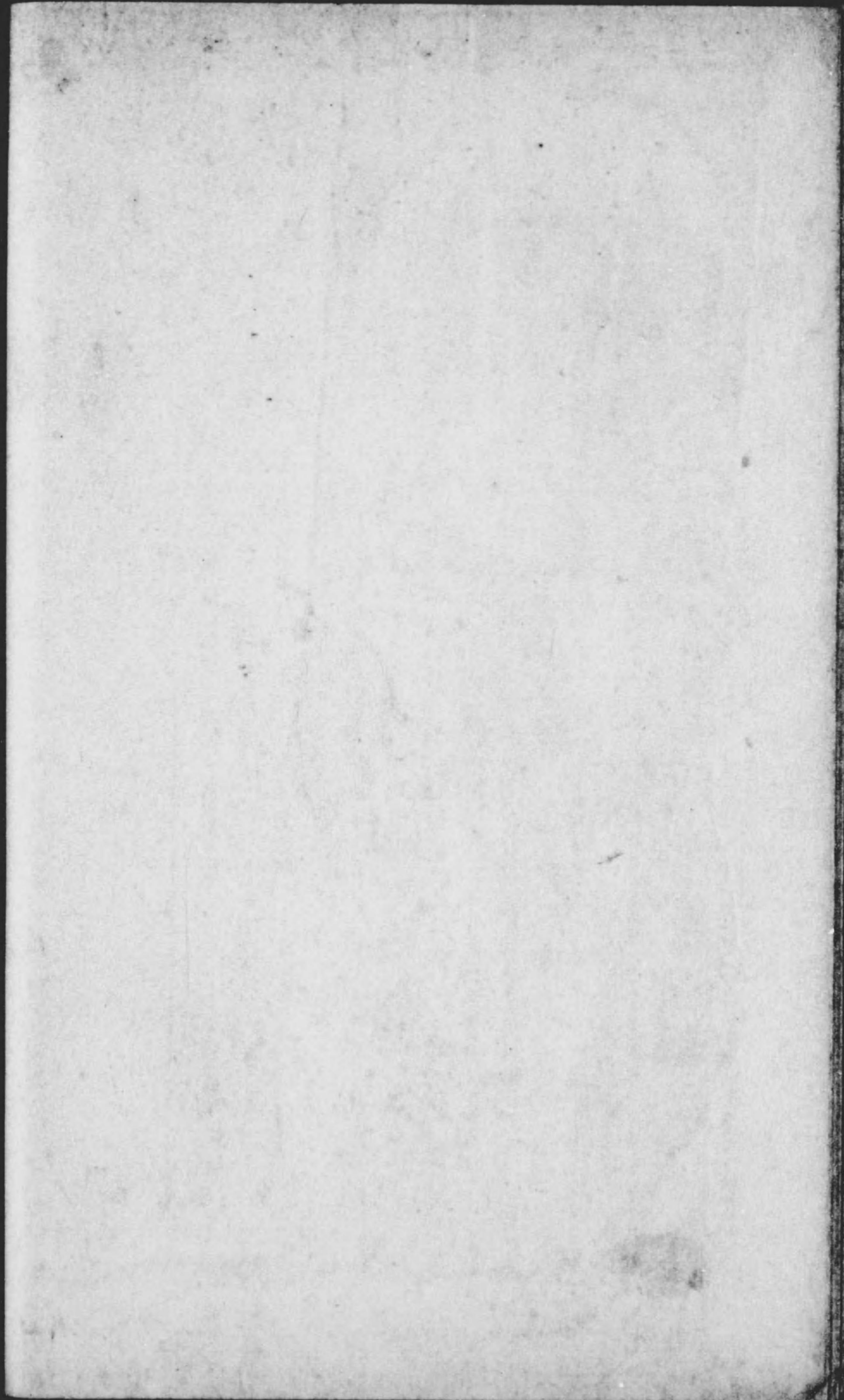
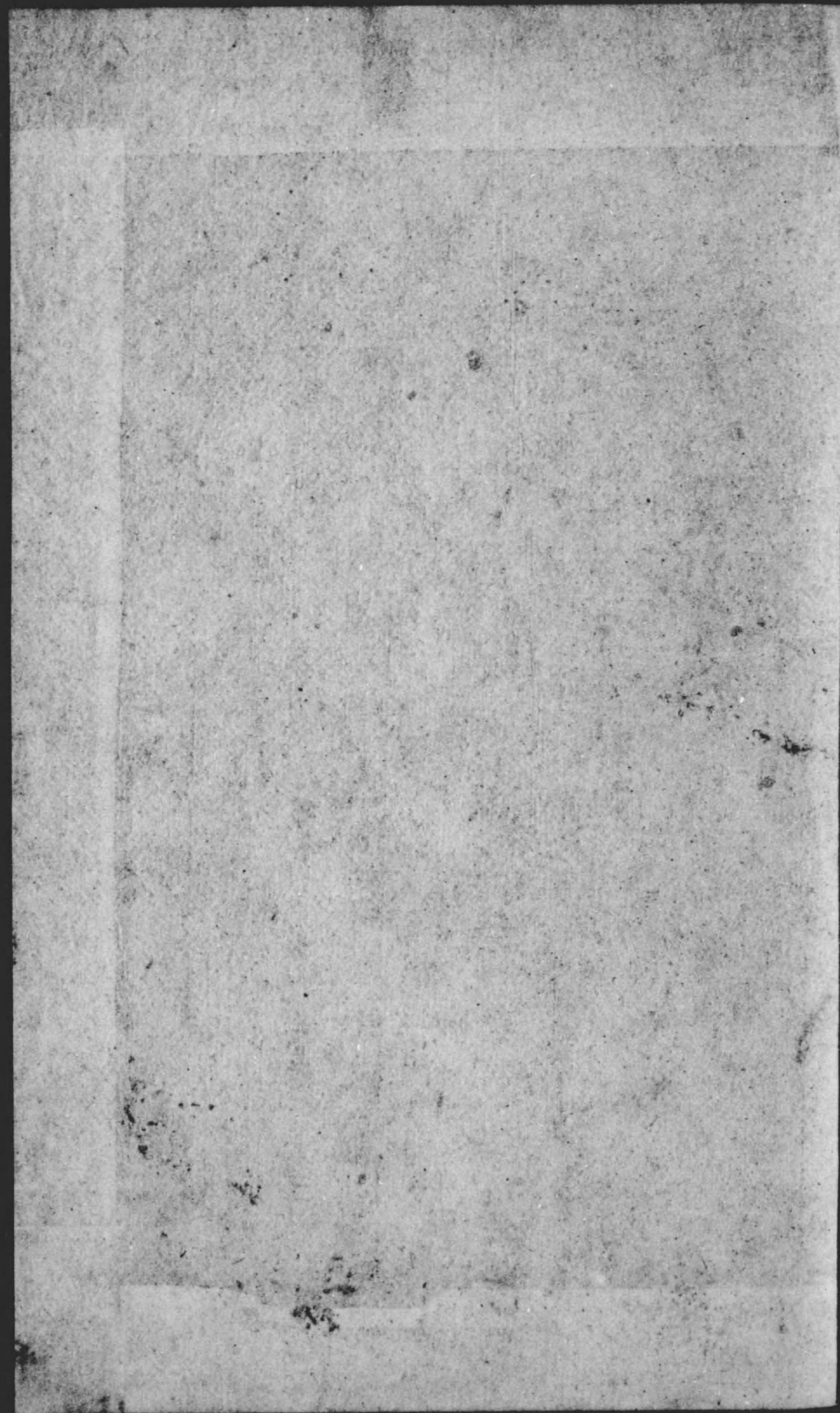
昭和三年十二月一日印刷納本
昭和三年十二月五日發行

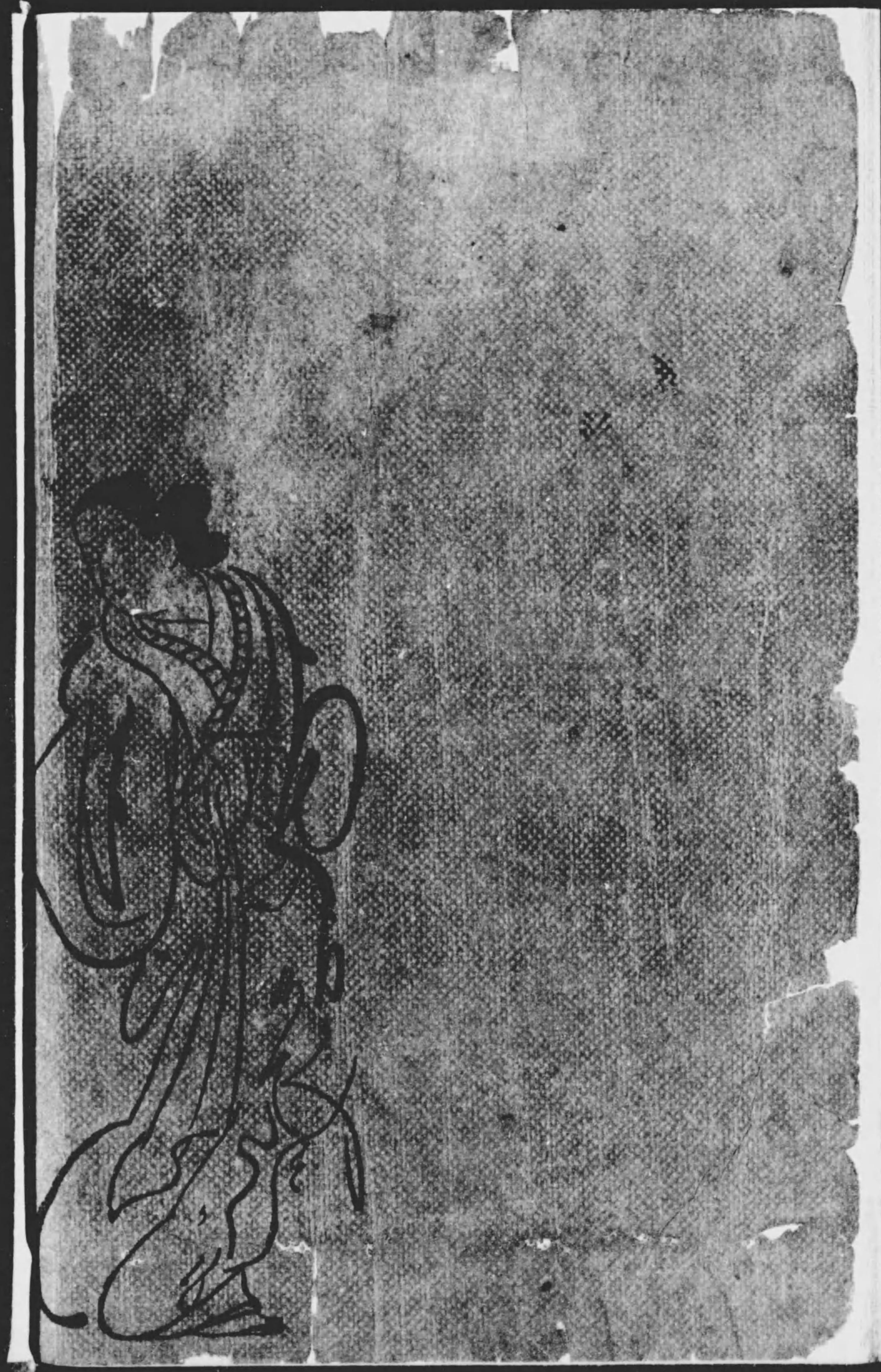
著者 封 醉 小 史

發行所 東京市牛込區西五軒町三十四
印刷人 福 山 福 太 郎

印刷所 東京市牛込區西五軒町三十四
福 山 印 刷 所

發行所 文藝資料研究會
東京市牛込區西五軒町三十四番地
電話牛込四三六〇番
總發東京四二三八七番





183
589

